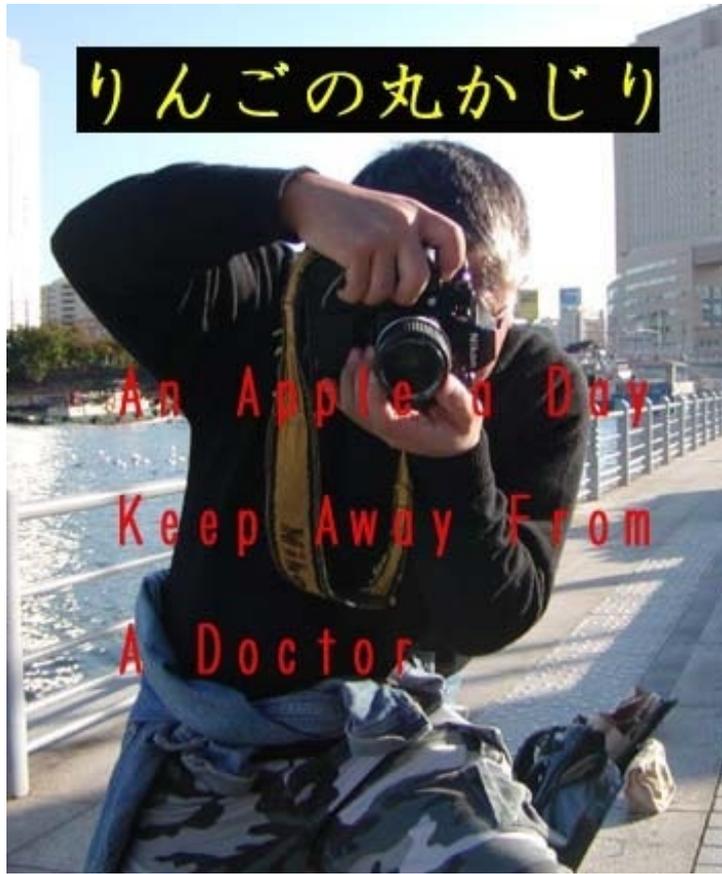


りんごの丸かじり



An Apple a Day

Keep Away From

A Doctor

アヤタ先生に「りんごの丸かじり」をお見せしたところ、

「文章がうまいねえ」

とほめられてしまいました。

元の上司にもほめられました。

溪流釣りで山道を歩いていたら、ボソッと、

「ブログの文章、うまいよ」

この人、めったにあたしのことほめません。

文章の上手をほめられているうちはダメでしょう。

素人じゃないんだからねえ。

プロ野球の選手に「野球がうまいねえ」といいますか？プロボクサーに「ボクシング、うまいねえ」といいますか？いわないよねえ。そんなことをいおうもんなら、顔面にいっぱつ食らうよ。

「やかましいわい！」

彼らは「それ以上のもの」でメシ食ってるわけです。

文章がへたでもプロにはなれます。編集者や新聞記者、フリーのライターのなかにはいくらでもそういう人がいます。ほとんどの人がそうだといいてもいい。文筆をなりわいとするのに文章のじょうずへたはどうでもよろしい。素人ではだめだけど、きちんと書いていればいい。意味が通じればよい。冗漫でなければよい。

上手な文章って鼻につくんだよねえ。あたしは嫌いです。

そりゃあ、あたしだって、人並みに文章の修行はしましたよ。そうだねえ、若いころは向田邦子氏の文章をよく読んだ。当時、本田勝一氏なんかも文章がうまい、ともてはやされてました。ちっともうまいとは思いませんでしたけどね。

ながらく新聞配達してました。新聞のコラムを読むのが日課となっていました。朝の配達を終え、店に帰ってきてから腹ばいになって新聞を読む。夕刊の配達を終えてから、新聞を仕分けする板の間の上がりかまちに腰掛けて読む。いいなあ、うまいなあ、と思った文章は切り取ってスクラップブックに貼り付けた。ノートに書き写した。あの時代、コピー機なんて手近になかったからねえ。

高校生のころから文学にはまったく興味がなかった。文学どころか本らしきものも読んだことがない。ボート部でしたからアタマよりもカラダを鍛えてました。

19歳で都会に出てきて、図書館を知った。世の中にはこんなにもたくさん本があるんだ、と驚いた。ウソだと思ってしまうでしょう？これがウソでもなんでもないんだなあ。中学、高校ともに学校の図書館には入ったことない。受験勉強など一切したことがないんだから。図書館に入る必要がない。高校時代、勉強なんてまったくしてない。図書館にいつてなにか調べものをする必要がないんだよねえ。困ったもんだ。

せっせと通っていたのは世田谷区の等々力にあった図書館です。日曜日になると通ってました。天上近くまで積み上げられた本を見て、

「この本、ぜんぶ読んでやろう」

と思ったもの。きれいにいえば、活字に目覚めたんだねえ。

ある日、電車に乗ったら、電車内の吊り広告に、

「寡黙」

ということばが大きく書いてあった。広告の一面にそのたった2文字です。それまで「寡黙」なんていうことば知らなんだ。衝撃だったねえ。広告のどこかには、なぜ「寡黙」なのか書いてあったように思う。だって、それで寡黙の意味を知ったんだもの。

ウイスキーかなんかの宣伝だったような気がします。なぜ驚いたんだろうねえ。「広告のことばの力」でしょうか。わかりません。とにかく驚いた。そのあとだったと思うけど、高橋克己の本で、

「饒舌は華麗なる言葉の死の葬列である」

なんていうことばを目にして、なるほどねえ、と感心した。

ふたつのことばは対になっとる。

それまで、あたしは、アタマは、掻くか、どこかにぶつけるためにしか使ってませんでした。

都会に出たおかげで、あたしのアタマの中には、田舎では出会わなかったことばがわんさか入り込んできた。先人たちのことばが、地中に種を蒔くようにあたしのアタマの中に植えつけられていったんだと思います。

決定的だったのは『朝日ジャーナル』という週刊誌の読者投稿欄に採用されたことです。

当時、早稲田に通っていた友人が、ある日、あたしのアパートに遊びにきた。この人、新聞配達をしながら2浪して早稲田にはいった努力家です。

彼が持っていた週刊誌をなにげなく読んでみた。当時、大学生はよく『朝日ジャーナル』を読んできました。あたしは高卒ですから、そんな、アタマが痛くなるような雑誌は読んだことがなかった。

フリーのライターが「老人問題」に関して書いてました。それを読んで、あたしは、ちょっと違うんじゃないか、と思った。老人問題というのはつまるところは若い人の問題でもあるんじゃないかと思った。老人というのはなにも最初から老人だったわけじゃない。あたしみたいに若い人が、ある日、ふと気がいたら老人になっていた、というしだいです。

記者は記事の結論をそこんところにもってくるべきだった。その視点が抜けてた。だから、あたしが代わりに指摘してあげた。

「この『朝日ジャーナル』オレに出来ないかなあ」

「いいよ」

友人が帰ったあと、さっそく原稿用紙を買ってきてペンをとった。なんどか書き直して翌日投函した。その日が投稿締切日でした。

投稿したことなんかすっかり忘れてました。

1週間ぐらいしたころだったでしょうか。あたしの文章が掲載された『朝日ジャーナル』と小切手が送られてきた。あれにはびっくりした。書くには書いたがまさか掲載されるとは思ってもいなかった。「読者投稿欄」とはいえ、天下の『朝日ジャーナル』ですよ。大学生がみんな読ん

でいる。それにあたしの書いた文章とあたしの名前が載っている。おそれおおくも、前々号の記事をやんわりと批判しておる。それを掲載している。

小切手なんていうのも初めて見ました。ちゃんと朝日新聞社の印が押してあります。額面は忘れもしない、¥3000です。喫茶店のウエイトレスの時給が300円の時代です。100円かそこらの原稿用紙が3000円に化けた。

これはいけるんじゃないか。

そう思った。

あたしは23歳になってました。4年ほど学んでいた絵を止め、ブラブラしていた。

絵の具よりもことばのほう扱いやすいと知った。なんだか新たな目標ができたように感じた。

たしか、5回ぐらい投稿して3回掲載された。

当時、目黒区に住んでました。目黒駅の近くの喫茶店でバーテンみたいなことをやってた。ハムトーストやピザトースト作ったり、スパゲッティ、ピラフを作って客に出していた。マスターは昼過ぎにやってくる。そういえば、あのマスター、小指がなかったなあ。

昼はスパゲッティを作る。夜は「読者投稿」に出す原稿を書いてました。

店のすぐ近くに、ちょっと高級な喫茶店がありました。銀座などあちこちにチェーン店を持つ喫茶店です。その店で配っているパンフレットに詩やエッセーが載っている。だれでも投稿してよい。採用されるとそのパンフレットに載る。3000円もらえる。こちらにもせつせと応募した。

書きたくて書くんじゃない。金がほしさに書く。賞金稼ぎみたいなもんです。

採用されるために文に工夫をこらした。とにかく読ませなくていけない。感動させなくてはいけない。どうでもいいような話を使って、いいなあ、と思わせる。それを800字前後でやる。

いくつか残してあったはずけどなあ。ちょっと探してみよう。

あ、やっぱ、なかったわ。ごめん。こんど出てきたら掲載します。

スパゲッティやピザトーストを作るかたわら、新聞を読んでいたら、「新聞記者募集」の記事が目に入った。そうそういつまでもバーテンやってるつもりはありませんでしたからねえ。これだ、と思った。

大手町にある、某大手新聞社系列の業界紙です。

面接にいったら、

「来週からこれですか？」

っていうじゃない。

フライパン握るよりもペンを握ってるほうがおもしろい。

ここには1年いました。

あたしが担当していたのは「商店街」というコーナーです。商店街が行うイベントを取材し写真撮ってくる。取材に行くのにスーツがない。取材に行くときは、例の早稲田の友人からジャケットを借りた。キオスクで300円ぐらいのニットタイを買った。

新聞記事は取材が主です。取材さえきちんとできていれば、書くのはわけではない。パターンが決まっていますからねえ。そういう意味ではここで学ぶことはあまりなかった。なにか学ぶことがあったとしたら、新聞記者はあたしがやる仕事じゃない、ということですかねえ。働いている

人たちを見てそう思った。10年やろうが20年やろうが、出世するかしないかの違いでしかない。そのうち定年を迎え、退職する。あたしはもっと別のことがしたい、と思ってました。

「りんご丸君、君さえその気があったら、社員にしてあげるよ」

労働組合の委員長からそういわれた。

あたしは大学へいこうと思ってた。ちゃんと勉強しておこうと思った。

こんなことがあった。

あたしの上司だった新聞記者が、同僚にある本を借りようとした。

「○○さん、この前、記事の中でいっていた本、貸してくれませんか」

「いいけど、あれ、英語だよ」

あたしの上司は英語が読めないらしい。「いいけど」といった新聞記者はニューヨーク特派員をしたこともある人です。どちらも、あたしをよくかわいがってくれた。あたしやあ、これでも年配の人からはかわいがられるほうです。いっしょに取材にいった先では食事をごちそうしてくれた。野球も見に連れてってくれたなあ。

元ニューヨーク特派員に相談しました。

「大学へいこうと思うんですけど」

「おお、いいじゃない。いきなさい」

てなわけで、あたしは明治学院大学の英文学科を出とります。なんで明治学院かといえば、当時、あたしは白金台の明治学院大学の近くに住んでおりました。大学に入る前に、大学の図書館で受験勉強してたっていうぐらいのズウズウです。

大学在学中は、エセ新聞記者の経験を頼りにフリーのライターやってみました。

授業と授業の合間にインタビューを取りにいった。昼飯をくっているひまがない。右手で原稿を書き、左手でスパゲッティを食べるなんてこともやってた。ほかの客が奇異な目で見ました。続きは授業が終わってから図書室で書いた。

インタビュー1本書いて、6000円である。毎日仕事があるわけでもない。1時間のインタビューに往復4時間かけていったこともある。女性騎手の取材のために1日かけて図書館で下調べした。それでも6000円である。

2日徹夜して書いていった現行の書き直しを命じられた。5本の体験記事のうち、2本は創作である。体験者が見つからなかったのだ。そのまま会社の残り、徹夜で創作記事を書いた。

ほんとうにプロになったのはこのころです。

書いてもっていった原稿が書き直しを命じられる。本文は通った。タイトルが通らない。

会社に残ってがんばったがダメであった。

「書き直してもってきます」

締め切りを1日延ばしてもらおう。

徹夜して考えた。それでもだめだった。目黒駅から中央線の中野駅までずっと考えた。地下鉄への乗り換え駅で乗り継ぎの電車を見送った。駅のベンチに腰を落ち着けた。通らないタイトルを持っていても恥をさらすだけである。腸が2回転するぐらい苦しんだ。

できた！

そこで折りよく入ってきた電車に飛び乗った。

請け負った原稿を納めての帰り道、堅気の人たちにまじって電車の揺られながら、

「ああ、これでオレもプロになったなあ」

ってしみじみ思ったねえ。

大学卒業後、某有名出版社で大活躍したのは皆さんもすでにご存知でしょう。5年にひとりであるかでないかの逸材といわれました。逸材かどうかはともかく、次々と辞めていく社員の多い中で、辞めるということを思いつかなかった。それだけでも逸材に値するかもしれません。

あたしは、ふだん、日本語の本はまず読みません。FM放送のDJのしゃべりが耳障りみたいに、いまの日本語が耳障りでしょうがない。

こんな文章。

「しゅぱーっと、乾いた音がして急行・中央林間行きが三軒茶屋で停まった。扉ががーっと開く」

『きょうもやっぱり処女でした』の書き出しです。なにも例文のためにわざわざ選んだわけじゃありませんよ。図書館で手じかにあった本をとっただけです。どれをとったっておんなじようなもんですからねえ。

先の文章は著者がわざと書いているわけでない。その証拠にはこれに続く文を見ればわかります。

「・・・もう、と思って横をすり抜けていくその人を見ると、六月だというのに、黒い短めの革のライダーズジャケットを着た女の子だった。わたしは一生はくことがないぐらいミニのデニムのスカートに、すうっと伸びた脚は白くて赤いペディキュアが紺色の革のサンダルにきれいだ」

あたしが書き写すときにまちがえたと思ったでしょう。まちがえてませんよ。

「サンダルにきれいだ」なんて日本語あるかい？うちの娘は騙せてもあたしは騙せまん。まあ、ドーナツ屋のショーケースに並んでいるドーナツだと思えば腹もたちませんけどねえ。

意図したへたくそと最初からへたくそな文章は違う。

だれだったか、どこかでいってますよね。音楽でも絵でも、うまいと思われるようじゃだめなんだって。へたになりなさいって。

でもねえ、プロとしてトレーニングを受けてきた人がもういちどへたに戻る、っていうのはそうとうむずかしいよ。「へたに戻る」っていうのは「素人に戻る」っていうのとは違うからね。絵描きの例でいえば、職業画家が幼稚園の園児みたいな絵を描くっていうことですよ。

園児には勝てないよお。

週に2日、仕事があって、幼稚園に通ってます。

たまに園児の絵を見ることがあるんだけど、天才的な絵を描く園児がいるよ。ほんと、才能に嫉妬します。

へたの例とは違うけど、なんど読んでも「いい」と思うのはやはり井伏鱒二先生ですねえ。普段着の感じがいい。『わさび泥棒』、『朽助のゐる谷間』なんか読んでごらん。なんど読んでも笑えるよ。

小山清なんかも好きだなあ。自然な文章の感じがいい。貧乏な家の出で若い頃新聞配達をし

てたっていう境遇があたしに似ている。親近感を覚えるんだらうねえ。きっと小山清も新聞の仕分けをする板の間に腰掛けて新聞読んでたらうと思う。

いま生きてたら、あたしは小山清のところに遊びに行くね。文章のなかで小山清がちゃんと生きている。ハナシを読んでいると彼がすぐそばにいる感じがする。いや、自分が書いている感じさえする。時の隔たりがない。作者と読者の隔たりがない。

川端康成みたいに名文家の列に名を連ねることはない。「日本文学全集」に作品が載ることもない。けれど、忘れがたい、いい文章です。流行作家でなかったからいいんだと思う。金のためには書いていない。

みすず書房から復刻版が出ています。こういう売れない本の復刻版を出すなんてすごいねえ。みすず書房は。

ついでに、上林 暁の本も復刻してくれるといいんだけどねえ。『聖ヨハネ病院にて』。上手とかへたとかの領域を超えていいよねえ。

どうしたら、へたな文章が書けるようになるんだらうねえ。ふつうの人が見たらふつうに見えて、プロが見たら、恐れ入りましたっていう文章。

修行かなあ。人間としての修行がたりないんだらうねえ。

もう手遅れかもね。

天才

最近、やたらと「天才」が増えたよねえ。そう思いませんか？

天才子役、天才演歌歌手、天才アニメ作家、天才TVディレクター、などなど。ほんとに「天才」なんですか。まさかねえ。

ちょっとかわいらしくて演技がうまいだけです。ほんとに天才なわけじゃない。テレビを見せる側の人間があんまり「天才子役」呼ばわりするものだから、テレビを見てる人間も無意識のうちに「天才」だと思って見てしまう。共犯者だね。

天才演歌歌手だってそう。子どもにしてはちょっと演歌がうまいに過ぎない。売り出すための宣伝文句です。おとなはいい。当の子どもがかわいそうだ。1, 2年もすれば「天才」の冠がつかなくなる。そのときになって当人がどんなに傷つくか。いや、すでに傷ついているかもしれない。

天才アニメ作家ねえ。あれが天才かねえ。こっちはおとなだよ。天才呼ばわりされて恥ずかしくないかねえ。恥ずかしいけれど、どうにもならないのか。逆に、売り出すために利用しているのか。

絵は古臭いだけじゃない。キャラクターだって類型化しとる。新しさがいいよ。自然に大切に、古い日本伝統を大切に、というメッセージらしいんだけど、それに対して、「異義あり」をいう人なんていないよ。どの作品を見てもおんなじパターンだしさ。あきらかに『砂の惑星』のパクリだと思われるシーンもある。ふつうの人は『砂の惑星』なんて知らないからねえ。パクリだとは気づかない。

いや、技術はあるんだろうよ。技術がなければできない相談だからねえ。

なんでもそうだけど、作品がヒットするというのは多くの人に受け入れられたからだ。じゃあ、その作品がすばらしいのかといえばそうではない。世のほとんどの人というのはバカだもの。バカに受けたってしょうがないや。

「借り暮らしの・・・」って聞いたときには、てっきり、あたしのような生活をしている人のことかとおもっちゃいました。カネやら恩やら、あたしはずいぶん人様から借りて暮らしてますからねえ。

毎朝、天才TVディレクターがテレビに出てくるたびに気持ち悪くてしょうがない。だいたいTVに出ている人って、バカ顔してるよね。歌手や役者は別ですよ。出てるだけでも恥ずかしいのに、そのうえ、「天才」を名乗っているんだからねえ。頭がどうかしているよ。どうかしてるから天才なんだろうね。どうかしてなきゃフツウの人だもんね。

ピカソは天才かねえ？いちおう、天才といわれているけど、天才というにはねえ。ピカソが天才なら、ゴッホもゴーガンも天才の部類入れたくなる。いや、あたしの基準ですよ。世間様の基準じゃあない。

アインシュタインは天才かも知れません。「時間は存在しない」といった人ですからねえ。あたしも、ずっと前から、時間は存在しないんじゃないか、と思ってた。漠然と思ってただけじゃあ、凡才です。理論的な証明の裏づけが必要です。もっともアインシュタインは脳に病気を抱えていたらしいです。人様の受売りですけど。

天才ってなんだろうねえ。辞書に載っているような解答を求めているわけじゃ、ありませんよ。

ジミー・ヘンドリックスはたしかにスゴイとは思いますが、天才と呼んでいいのかどうかの判断はちょっとむずかしい。マイケル・ジャクソンなんかもおんなじ線上にある。冠をつけるとしたら「天才的」だろうね。

あたしが数えただけでも日本には4人も「天才」がいるんだから、世界にはもっとたくさんの「天才」がいるんだろうねえ。

いちど、世界中の天才を集めて、「世界天才選手権」でもやってみたらどんなものでしょう。

水木しげるの『ゲゲゲの女房』(NHK朝の連続テレビドラマ)を見ていたら、

「河童が住めんような世界には人間もよう住めん」

みたいなセリフが出てきた。人間は自然がなくとも生活は営める。河童はそうはいかん。なにしろ、池なり沼がないといけませんからなあ。

いまの子は河童なんて知らんでしょうなあ。「いまの子」どころか30代、40代の人だって、河童といわれても実感がありません。

50代のあたしがいなかに住んでいた時分、河童はたしかに沼にいました。

村はずれの山あいには用水池があった。ここから川が1本流れ、その水をたんぼに引く。

プールなんてありませんでした。あたしはその用水池か川でよく泳いだもんです。つげ義春の『沼』というマンガを読んでください。ちょうどあんな感じの沼です。森閑としていて、ふだんは人けがまったくない。春には蛙がよく泳いでいた。蛙をねらうヘビが草むらを這っていた。秋ならとんぼが沼の上を飛び交う。水面に尻尾をつけて卵を産む。水すましが水の表面張力を利用して器用に水に浮かんでおる。なぜ沈まないのか不思議な感じがした。沼のへりには野いちごが自生していました。

親分らと沼に潜り、カラス貝を取ったこともあったなあ。家からマッチを持ち出し、沼のへりで焼いて食べた。

沼の真ん中には大きく深い井戸があって、そこから絶え間なく水が湧き出ている。それで沼の水は枯れることがない。

親分はカラス貝を食べながらそんなことを話してくれた。

「河童もいる。オレは前に見たことがある。全体に青くてなあ。頭の上に皿が乗っている。あいつら皿が乾けば死んでしまうから、ときどき皿を水で濡らすんだ」

河童はふだんは沼の中にある井戸の中に住んでいるらしい。

沼に遊びにきた子どもを見つけては沼の中に引きずり込む。井戸の中の巣につれていく。

「河童に引きずりこまれたら終わりだな」

カラス貝というのは黒くて大きい。カラスの羽みたいな色をしている。形はムール貝(イガイ)と似ている。子どもの手に余るぐらいの大きさがある。東京に出てきて初めてイガイを見たとき、あっ、カラス貝じゃん、と思った。

赤腹もいた。水中に住む。ヤモリみたいなもんである。カニを捕まえようと、沼のへりの穴に手をつっこむ。カニの代わりに赤腹が手の中にある。ひっくり返すと腹部が真っ赤である。気持ち悪いぐらいに赤い。あわてて放る。

沼は人工的に作られたものだと思う。小さいころ、そんな話を聞いたことがある。あたしの祖父か曾祖父の時代だ。沼とその下流の水田との間には人工的な形をした高い土手がある。それがなによりの証拠である。水田に引く水を得る必要があった。きっと、村人総出で土手を築いたんでしょう。

土手には取水口がある。板で水をせき止め、一定以上の水が沼から流れ出ないようにしてある。沼から落ちる水が日夜滝のような音をたてている。落ちたところが壺になっている。おとなで

も足は立たない。おとなではなかったけれど、親分が実証して見せてくれた。

壺の上を木々が覆う。枝の影と水の深みで水中はよく見えない。

親分はここにも河童が隠れていることがある、といった。壺には沼から落ちてきた鯉やフナが住んでいる。大きな鯉がゆっくりと泳いでいるのを見たことがある。河童はそれを捕らえて食う。

暗い水面に目を凝らす。水面の下からもふたつの目がこちらを見つめていた。

壺で一休みした水は村を通る細い川へ流れていく。川岸にたくさんの菖蒲が咲いていた。

土手にはススキがたくさん生えておる。おとなが隠れる高さがある。ススキのせいで本来の道が隠れてしまっている。

小学校3年生のころだったろうか。学校から帰ったら母がいない。山の畑に探しにいった。

山の畑にいく道はふたつある。母とすれ違いになってもいけない。沼の土手を経由する道を選んだ。

だれもいない山道をひとりでいくのは心細いよう。ススキをかき分け、足先で道を探しながら進む。先の見えない道を進むぐらい怖いものはない。なにが飛び出してくるかわからないもんね。

とつぜんおとなが現れた。校長先生であった。校長先生は自分で作った竹製の鳥かごを肩から下げている。先にトリモチをつけた竹ざおを持っている。小鳥を捕まえて飼うのが趣味なのだ。校長先生はあたしをみてちょっと笑顔を見せた。とつぜんのこと、あたしはあいさつさえ忘れた。校長先生も驚いたろうね。

日が傾きかけた畑に母はいなかった。帰りは別の道を通った。

もういちど土手を渡る勇気はなかった。

なん日も雨が降らなくて、沼が干上がったことがあった。沼の真ん中に細い川が1本できた。泥の間をヘビのように這う。ススキをかきわけ、土手の上から、親分がいていた井戸を探してみた。そんなものはなかった。遠くの山すそから細い川が1本流れているだけである。

取水口の板はすべて外されていた。滝が落ちるような音は消え、わずかに水が落ちていた。

壺の底も見えていた。

雨が降り、沼はまたもとの深みに戻った。取水口からは前のような水の落ちる音が響く。下の壺にも深みが戻った。河童も戻った。

この10数年後、高校を卒業し、あたしは地元の旅行会社に勤める。3カ月で仕事に見切りをつけ、東京に出る。紆余曲折の末、大学に入り、卒業後、出版界に足を踏み入れる。

河童と対峙していたころ、まさか、そんな人生になろうとは考えもしなかった。

河童はたしかにいた。河童がいたから、あたしは、その不思議な力を授かった。

ガスバーナー

仕事でガスバーナーを使っております。いや、溶接工をしているわけではありませんよ。趣味で木製プランターを作っておるだけです。腐食防止のために木の表面を焼く。そのときにガスバーナーが大活躍するんです。

そんな大げさなものじゃありません。アウトドアキャンプなんかで使う、簡易バーナーです。カセットコンロ用のガス容器にバーナーの器具をセットして使います。青白い炎が噴出されます。

手軽ですが使い方を誤るとけっこう危険です。キャンプ中に同種のガスが爆発して死んだりしてますよね。「手軽」だということは取り扱う技術、知識がなくても扱える。だからといってそれらが不要なわけではない。ここんところを勘違いするんですね。それで大けがする。注意書きをよく読めばちゃんと書いてがあるんだけどねえ。

小学生のころ、似たような遊びをしてました。ヘアースプレーの缶を拾ってくる。川なんかによく落ちてました。使い終わったスプレー缶は内部に多少ガスが残っている。そのガスを噴出させマッチで火をつける。爆発はしません。大きな炎が出る。男の子はこういうことに興奮する。

「ワーッ、炎が出た！」

ってなもんでね。

缶内部のガスに引火すれば爆発するんだらうけれど、幸いというか、あたしらのときは爆発しなかった。やがてその遊びにも飽きました。

線路の上に五寸クギを置いて列車にひかせたこともあったなあ。あのころはかんたんに線路内に入りできましたからねえ。1本のクギの上を何百トンもある車体が通過する。クギは線路と列車との間にはさまれる。青竜刀みたいのができる。砥石で研ぐ。ちゃんとナイフになります。男の子っていうのはこういう制作過程も好む。

弓矢もよく作った。パチンコも作った。やなぎの木の、Yの字になった部分を切り取る。ゴム管をつける。これでスズメを撃った。

マンガを読んだら、なんとかという博士が不要になったプラスチック製品を溶かして新しいロボットかなにかを作るシーンが出てきたことがあった。さっそくまねする。プラモデルの、パーツを切り取った枠をなんかの金属の容器に入れ、ガスコンロの上にかけた。煙が発生し、ものすごい異臭がした。耐え切れない。タオルで鼻と口をおおう。効果がない。濡らしておおう。けっきょく、プラスチックの切れ端は思うように溶けてくれなかった。それより、プラスチックが溶ける際に発生するガスに耐え切れなかった。

おとなになって、なにかのときに、プラスチックが溶ける際には毒ガスが発生すると知った。あのまま作業を続けていたらおそらくガスの毒で死ぬか脳がやられていたかもしれない。

「よい子はまねをしないように」とかなんとかひとこと、書いておいてほしかったね。

女の子がママごとをするのと同じなんだと思う。狩猟や製造の「ママごと」なんだよね。いずれ、おとなとして実用品を作るときの練習です。男の子はこういう過程で、たいていケガをする。失敗もする。かなづちで自分の指をしたたかに打つ。ナイフで手を切る。弓矢があらぬ方向に飛んで人を傷つける。矢が目ん玉に刺さった子もいました。死なない程度に失敗なりケガを

する必要があるんだと思う。失敗して死んでもいいように、男の子は多少多めに産まれるそうです。進化の犠牲っていうやつですね。

あたしが「子ども時代」というのは昭和30年代のことです。1960年代。

いま日常生活でクギを打つ必要性なんかほとんどないよね。

「お父さん、ここんところにクギ打ってよ」

なんていうセリフ、ありえないでしょ。ちょっと前のマンガなんかにはあった。壁にクギ打って洋服なんかかけた。あるいは壁にクギを打って棚を作った。いまそんなこと必要ないもんね。

いま、街中でのこぎりひいたり、クギ打ったりしたら、人垣ができるんじゃないかね。

お母さんが、子どもに、

「ほら、クギっていうのはああやって打つんだよ」

なんてささやいたりして。

あたしよりも若い人を見ていて思うのは応用がきかないってことです。実生活でのちょっとした応用がきかない。

車載用のテレビがある。12Vの電源で動く。バッテリー作動だから直流です。このテレビを家庭用コンセントの100Vから電源をとって映すにはどうすればよいか？12Vの電源アダプターをさがしてつなげばいいだけです。家庭用ゲーム機用、電話機用、ノートパソコン用など、不要となったアダプターはいくらでもあるはず。12Vがなかったら10Vで試してみればよい。動くかどうかはやってみればよい。15Vなら間に抵抗をはさんで電圧を落としてあげればよい。プラグの規格が合わなければ線をむき出しにする。直結すればよい。

逆に100Vで動く製品を車の中で使うにはどうすればよいか。アダプター経由で動いているものはアダプターを取り払い、バッテリーもしくはシガーソケットと直結すればよい。アダプターを経由しないものは製品の中に、100Vを12Vないし10V程度に変換する回路が組み込まれています。この回路を取り外し（もしくは切断）、カーバッテリーと直結すればよろしい。

マイクがなかったらヘッドフォンをマイク端子に差し込む。ヘッドフォンに向かって音声を発すれば（声を出すってことですけど）、ちゃんと音を拾ってくれます。スピーカーは、電気信号が流れてきてそれが音声に変換される。なら、音声を入れてやれば逆に電気信号が発生しマイクの代用になる、という理屈です。

想像力と実行力の成果です。

うまくいかないこともある。うまくいくほうがむしろ珍しいんだけどさ。この「うまくいかない」というのが実は大事だなよね。うまくいかない、なんらかの原因があるはずなんだ。うまくいかない原因を想像する、さぐりあてるってことが解決の糸口になる。そういう試行錯誤が大事だと思うんだよね。

$A+B=C$ ならば、 $C-A=B$ になるのではないだろうか、という発想が日常の生活でできるということが大切なのだ。それが「生きていく力」みたいなものにつながるんじゃないだろうか。

甥っ子がキャンプにいった。あたしにいわせればキャンプでもなんでもない。監督者がいる。保険がかけられている。すべて管理され安全が保証されているんだよね。

非日常の世界にいくんです。死なない程度に危険な目に遭ったほうがよい。新聞に載らない程

度のトラブルを体験したほうがよい。テントで寝た。マキでご飯を作った。なんていうのは家の庭でもできるもの。

懐中電灯片手に暗い草むらでウンチを垂れる。手元に紙がなければ草の葉で拭けばいい。雨が降ってきてせっかくの料理が台無しになる。こういうことにキャンプの意義がある。

包丁忘れてくることもあるだろう。ガラス片を拾ってナイフをつくれればいい。木で柄を作っ
てね。火がうまくつかなかったら川原で百円ライターとスプレー缶を探す。ゴミを捨てるなっ
ていうけど、こういうときに釣り人が捨てたゴミが役にたつ。

釣り道具をいっさい持っていかずに、どうやって魚を釣るかみんなで知恵を出し合う。

ほんとはおとななんか行かないほうがいんだよね。おとながいたら、危ないことはみんな禁止
だもの。「無事終了」じゃあ、なんのために行くのってという話だよ。

小学校何年生のときだったか忘れたけど、夏休みに親分たちとキャンプにいった。たしか4
人だった。S君もいっしょだったなあ。親分がどこからかテントを調達してきてさ。1泊2日。海
に入って泳いだ。飯ごうを使って飯を作った。雨が降ってきて濡れたなあ。親は農作業に忙しく
てどこにもつれていってくれませんかからねえ。子ども会があるわけでも、学童保育があるわけ
でもない。ほんとに楽しかった。その後の親分（ふたりいた）の行方は知れないけれど、いまでも
感謝はしていますよ。

スプレー缶でガスバーナー作る。線路にクギを置いてナイフを作る。こういったことはすべて学
校では禁止です。いっぽうで、学校教育で「生きていく力をつける」というんだから笑っちゃ
うよね。あたしがスプレー缶でガスバーナー作って遊んでたころ、一所懸命に勉強に励んでいた
奴が考えたんだらうね。アホです。

笑っちゃうね。床屋さんへいったら、つむじ（旋毛）でほめられました。

つむじってというのはふつう、頭のテッペンにあるものらしい。

あたしは前にふたつ、後ろにふたつある。つごう4つである。最強である。

前のふたつは高校生のときに知った。てっぺん近くにひとつあるのも鏡で確かめた。

「後ろにもひとつありますね」

どこだったか、35, 6歳ごろ、別の床屋さんでいわれた。

前のふたつは右回りと左回りです。ちょうど角が生えておかしくない位置に逆向きである。

俗に、つむじの左回りは「頭がおかしい」といわれてます。

「あいつは左巻きだからなあ」

なんていういいかたをされる。いまはもうされないのかなあ。あたしが子どもの時分にはよくいわれたモンです。

「つむじ曲がり」、「つむじを曲げる」といういいかたもされる。どだい、ほめことばには引用されない。

角が生えておかしくない位置に、つむじがふたつ、それも左右で回転が逆というのは困るよお。髪をセットするときに困る。髪がそこで立っちゃうんだよね。7,3分け、ってわかるかなあ。頭髪を左右に分けようとするとき、つむじが障害となる。髪がうまく寝てくれないわけ。どっちから分けるにしてもね。真ん中から分けたり、パーマをかけたこともありました。

いまでは棟梁みたいな頭です。

「両脇、後ろは6mmのバリカンで上まで刈り上げ。上のほうは全体に3cmぐらにしてください」

床屋さんのイスに座るなりいいます。

これだどつむじも障害にならない。バイクのヘルメットをかぶるにも髪がじゃまになりません。

めでたし、めでたしである。

最近は浦賀にある美容院で髪を切ってもらっています。

「男性歓迎。タイムサービス カットのみ¥690」ですよ。

そのの、35, 6歳の女性美容師さんにいわれました。

「つむじがたくさんあるせいで、髪がうまいぐあいに寝てくれるんですね」

髪を短くすると、どうしても髪が立ってしまうのだそうです。

そういえば棟梁の髪は立ってますね。

「きっと、小さいころはやんちゃだったんでしょうね」

実際、そうだったのでいっしょに笑ってしまいました。

ええ。あたしゃ、小さいころも、大きくなっただいまも、やんちゃです。

振り返ってみれば、やんちゃでなくては生き残れなかったかもね。

家の軒下まで雪が積もるんですよ。朝、目が覚めると部屋の中にまでうっすらと雪が入りこんでいる。

外でさんざん遊んで、家の中に入る。冷たかった手がストーブの熱で暖められた瞬間、両手が、針でも刺したように痛む。どうやってもその痛みが消えない。あの痛みになんぞ泣いたことか。

小学校では、先生のかげ声で、授業が始まる前にみんなで両手をこすり合わせる。そうしないと鉛筆が持てないんだから。授業中は上着を着てもいい、という日もあった。マキストーブじゃあ、教室全体はあったかにならないからねえ。給食はなかった。アルマイトの弁当をストーブの上に乗せ、温めました。牛乳ビンも温めた。お湯を張った金ダライに牛乳ビンを並べる。これは無料支給だったんじゃないだろうか。たまに熱でビンが割れることがあったなあ。

戦後の話です。

いったん吹雪けば1メートル先だって見えません。そんな中をわずか7歳か8歳の子が4キロも5キロも歩いて学校まで通うんです。車で送り迎えなんてとんでもありません。不思議なことあまり遅刻する子もいなければ、雪のせいで学校を休む子もいなかった。みんな強かったんだねえ。男の子も女の子も。親も生きていくのに必死でしたからねえ。誰かに助けてもらえなければ、子ども自身が自然と必死にならざるをえない。

あたしは背は低かったけれど、一度けんかになったら絶対に負けなかった。根が負けず嫌いなんだねえ。

発端はなんだったのか忘れた。S君と口げんかになった。じゃあ、力で勝敗を決めようということになった。稲刈りの済んだ田んぼにいった。遊び友だちが輪を作る。その中でS君と向かい合った。

力では負けるのはわかっていた。彼とはなんどか相撲をとった。一度も勝ったためしがない。

「始め！」の声でいきなりS君の耳に噛みついた。そこがいちばん噛みつきやすかったからである。

体の大きかったS君はあまりの痛さに大声を上げて泣いた。それでもはなさない。みんながよってたかってあたしの口をこじ開けました。おそらくあたしの口は血を吸ったあとのドラキュラ伯爵の口みたいになってたでしょうねえ。S君はすぐに医者に運ばれました。

翌日学校にいったら、先生が、

「きょう、S君は学校休みです。きのう、りんご丸君とけんかして、耳を噛み切られ、4針縫ったそうです」

そう報告した。

「耳たぶ4針」がどの程度のけがなのか想像できませんでした。そうとう、痛かったんでしょうねえ。広い田んぼで泣き叫んだS君の声がいまでも耳に残ってますもの。

S君とは仲が良かったしよく遊んだものでした。家もすぐ近くです。

S君は家庭環境に恵まれていませんでした。家庭環境に恵まれた子なんてそもそもいたのかどうか怪しいけれど、その中でもS君は同情すべき環境にはあった。

父親が失踪し、それを追って母親も失踪した。兄弟は6人だったか7人で、上の姉や兄が全体の家族を見ていました。兄と姉が母親と父親の代わりだったのです。

残念ながらS君は成績はあまり良くなかった。みんなで遊んでいてもからかわれるほうが多か

った。

親分から、「薬局にいて、サックをください」といえ、といわれたらしい。指サックだと思って「サックをください」といった。

「小学生のお前がそんなもの、なにに使うんだ」

と薬局の主人から怒られた。これは後日、聞いた話である。

「笹モチ」というのがある。笹の葉にくるんだモチである。親分が道に落ちている馬糞を笹にくるみ、S君に、「笹モチをやるよ」といった。これはあたしも現場にいあわせた。ひどいことするなあ。同情しました。

人のいうことを信じて疑わない。からかいの対象になりやすいのである。

E君も勉強ができない。宿題をやってこないのである。なんで、こんなかんたんな問題ができるのか、いつも不思議に思っていた。作文の時間に理由がわかった。

「僕が学校の宿題をしようとする、兄に、勉強なんかするな、といつもたたかれるんです」そう書いていた。

J君のことも忘れられない。父親は出稼ぎ大工かなにかで、ほぼ1年中、家にいない。母親は日雇い人夫である。成績はあまりよくない。おとなしく、あたしはよく遊んだ。

葦（あし）の間に小鳥のひなを取りにいったときだったろうか。ひなを取って、帰りに彼の家に寄った。道路からずっと下った、線路沿いの家である。夜通し列車が通る。うるさくて眠れないだろう。土足で上がっていい、という。そのとおり、普段から土足で上がっているらしい。板の間に新聞紙やら生活用品が散乱している。部屋の隅にふとんが敷いたままになっている。いわれなければ、人が住んでいる家とはいえない。生活の痕跡がない。彼と彼の兄は毎日ここで寝起きている。日雇い仕事から帰った母親は彼らに夕食を食べさせ、朝食を食べさせて学校に送り出す。父親が定期的に仕送りしてくれているかどうかは怪しいものである。

S君もJ君も、中学に上がったからはやくざの使い走りみたいなことをしていた。私はもう彼らとは口をきくことはなかった。ふたりともやくざが使うような口調でいっているのを聞いたことがある。ふたりとも高校には進学しなかった。

私が高校に通っていた時分である。たまたまバスの中から、S君とJ君がやくざ風の人たちといっしょにいる場面を目撃した。

生活環境に負けてはいけない。

あたしが、そうならなかったと自負できるのは、ひとえにつむじの恩恵かもしれない。

指紋がついてきた

近所の写真屋さんにプリントをお願いした。帰ってきて驚いた。できあがった写真になにやら指紋らしきものがついていたのである。

驚いた、というよりがっかりした。その場でたしかめていれば文句もつけられるんだけど、家に帰ってきてからじゃねえ。

「あんたがつけたんでしょ！」

っていわれても嫌だし。

そういえば、写真を手渡されるときに、店の若奥さんが写真を袋から出してわざわざ見せてくれたんだよねえ。

「3枚ですね」

あんときついたと思うんだ。若奥さん、それまで奥の部屋で食事でもしてたらしい。店に出てくるとき、ちゃわんやはしの置く音がしたもの。

こういうとき困るんだよね。いつも利用している店だし、変に感情がこじれてもいけない。いや、写真屋さんは隣の駅にもあるんだけど、毎回そこまでいくのがめんどろ。プリントを頼むときと受け取るときの2回、足を運ばなくちゃならない。

どうしたもんかねえ。ちゃんと事情を話してやりなおしてもらうべきか。なにもいわずにもう1枚プリントしてもらうべきか。

2Lサイズで1枚、150円だからそんな大きな出費でもないんだけど。

そんなことを考えているうちに、近くのコンビニでカラーコピー機から直接プリントできることを思いだした。

そもそも、一度プリントしたものをカラーコピー機でA3に拡大しようと思っていたのです。そんなら最初からA3用紙に出力すればいいだけの話です。

なにも写真屋さんの営業を助けてあげなければいけない義理はない。15年以上利用しているけど、親しくなった感じがしない。無愛想ではないけど、ご主人も若奥さんも愛想というものをしらない。

ひとこと、

「また、よろしくお願いします！」

とでもいえばいいものを、

「ありがとうございました」

で終わりである。それも感情もなにもこもっていない。こりゃあ、だめだよ。

いちど、ご主人と郵便局でぐうぜん出くわしたことがあります。向こうはちょっと振り返って、

「あっ、どうも・・・」

私なら、ちゃんと正面を向いて、

「こんにちわ。ぐうぜんですね。いつもお世話になっております。またよろしくお願いします」

」

ぐらいいはいうよ。いや、もっというかもしれない。こちら、話好きだからねえ。

商売っていうのは「愛想」が大事なんだよ。気分よくお客を迎えて、気分よく帰してあげなきゃ。おそらく若夫婦そろって、ほかで勤めたことがないんだろうねえ。そういうトレーニングを受けたことがない。

コンビニの店員は愛想いいよ。ガソリンスタンドの店員も、まあ、いい。そういう指導を受けているからねえ。親の教育や生まれもった性格というのものもあるから、一概にはどうこういえないんだけどさ。利用者としては同じサービスを受けるなら、少しでも愛想のいいほうに足が向くっていうのは世の道理だねえ。

いまどきのコピー機は性能いいねえ。メモリカードに画像データを入れてもっていけば、データから直接カラーコピーができる。拡大・縮小自由です。撮影日まで入れてくれます。

カメラ屋さんの機械だっておそらく同じような仕組みで動いているはずですよ。メモリカードをもっていけばそこからデータを読むんだからねえ。違いは、出力するときにコピー用紙ではなくて印画紙にプリントする。印画紙はゼラチンを塗ってある。できあがりの色に深みがあり、きれいです。紙に厚みがある。しっかりしています。ただねえ、ゼラチンだから指紋がつくんだよね。保存状態が悪いとカビが生えてくる。コンビニとの違いは、機械を操作する人間が気のきく人で、写真のセンスがあれば微妙な色の調整をしてくれるっていうことかなあ。まあ、ふつうはわざわざそんなことしないと思いますけどね。

カラーコピー機はそれこそ「機械的に」処理します。操作するのはお客自身です。お客が操作をまちがえれば、まちがったものがプリントされて出てくる。責任がお客に転嫁される点が写真店の機械と異なる。愛想もいわない。指紋がつくこともない。どちらも、仕上がりは似たようなものです。カラーコピー機は、なにより安いのがいい。A3プリント1枚で120円は安い。

まあ、たしかに「指紋」はアナログの証明ではあるんだけど、どうせつけるなら、なんか、別のアナログ的なものをつけてほしいねえ。でないと、街の写真屋さんは、商売としてデジタルコピー機に負けちゃうね。

久しぶりに釣りにいきました。ほぼ2年ぶりです。もっともブランクの間、まばらに溪流釣りのほうをやっていました。海釣りは久しぶりです。

ときどき無性に釣りをしたくなる。無心に遊びたくなる。

競馬をしたくなる、パチンコをしたくなる、ゴルフをしたくなる、酒を飲みたくなる、のといっしょかもしれません。こちら、それらのどれもやらない。よって釣りです。

酒飲みに行きつけの店があるように、釣り師にもいきつけの場所がある。××湾の近くにある堤防にいてみることにしました。以前はよくここに通っていた。家からバイクで20分ほどの距離です。まあ、ふつうの人はいかない。いきたくともいきかたがわからない。釣り雑誌に書かれることもありません。不法侵入みたいなものです。

大根畑をよこぎり、「この先行き止まり」の看板を無視してつき進む。「私有地。立ち入り禁止」の看板がある。「へっ」てなもんです。こんなのいちいち気にしていたら、釣りなんてできません。

別荘地の横の坂を下る。「許可なく立ち入り禁止」と書かれてある木戸のすき間に手を差し入れる。裏から掛け金を外す。

そんだけのことです。

今回は、いぜん、テレビの「無人島0円生活」のロケ地となった場所から入りました。地続きだから無人島でもなんでもないので、左右にカメラを振らなければ、無人島といわれても通用する。それぐらいさびしい場所です。

さびしいよー。昼だってめったに人はいない。ちょこっとした砂浜がある。最後に使われたのはいつなのか、漁師の舟が置いてある。あとは岩場です。大潮でもない限り、海伝いには、ここには入ってこれない。大根畑からの入り口も知っている人でないと、ちょっと入るのはむりでしょう。

どんぐらいさびしい場所かは夜、釣りをするとわかります。

背後は、25メートルぐらいはあるような崖です。ジャングルのように木々におおわれている。左右、背後から世間のあかりが入ってこない。東京湾なら対岸に横浜や房総半島の明かりが見えます。深夜行きかう船のあかりが見える。左右、背後はいやでもマンションのあかりが見える。相模湾っていうやつは行きかう船がない。対岸の伊豆半島にはめぼしいあかりはありません。

遠くに油壺のあかりがちょっと見える。世間とつながっている感じがするのはそれだけです。

月の光があれば、それを頼りとする。「月光浴」としゃれこんでね。

浜から突き出た岩場最前部に立つ。4月ごろ、ここで26、7センチのメバルを釣ったことがあります。夜の8時ぐらいでしたかねえ。

釣り師っていうのは、1匹くると、「もう1匹くるんじゃないか」と思ってしまう。それであともう1投、あと1投と思う。時間の感覚が麻痺してくる。

離れた場所に電子浮きの小さな赤い光が見える。そこに釣り人がいる、っていうことです。

そのうち、その電子浮きが見えなくなる。いよいよひとりです。釣っているうちはまだいいんだね。釣りに心が向かっていますから。道具をしまいかけるあたりから背中がぞくぞくする。

夜の海ってどうしてあんなにぞくぞくするんだらうね。自分の体の周囲になにか亡霊めいたものがうごめいている感じがする。とくにあの場所はいけない。大根畑に上がるまでの上り坂は自分の背丈以上もある草や木々が茂っている。その間を歩いていかなければいけない。なんかねえ、うじゃうじゃいる亡霊の間をかき分けて歩いている感じがするんですよ。木や草の間から亡霊めいたものがのぞいているような感じがする。横を向くとそこに顔があるような気がする。後ろから肩をつかまれる感じがする。絶対に横は向かない。ひたすら前だけ見て、急斜面を大根畑まで上がる。よくこんな場所でロケやったね。

だいぶ前の話になるけど、外国人女性を殺して、油壺付近の崖の穴に遺棄した事件あったよね。このへんにはそんな穴がたくさんある。死体を遺棄した穴がどの穴なのか特定できないので怖いんだよね。夜の洞窟はちょっと近づけないよ。

6月です。この日は晴天で、27度ぐらいありました。おまけに大潮です。磯伝いに歩ける。目的の堤防までは海を歩いて渡れます。暗い坂道を下って浜に出た。珍しく、浜に人がいました。それも裸です。砂浜にバスタオルを敷いて日光浴をしています。

あたしは目が悪いですからねえ。女に見えました。どれ、背中にオイルでも塗ってあげましょうか。砂浜とはいえ、あちこに岩が突き出しています。それを乗り越え、彼女に近づく。

視力がはっきりするにつれて、「彼女」ではなくて「彼」であることがわかりました。パンツさえ、はいていない。見られてはいけない部分を両手でおおい、遠慮がちに私のほうを振り返りました。

嫌だねえ。見たくもないもの見ちゃいました。

向こうも、まさか人がくるとは思わなかったでしょうねえ。

なにをいわれるかわかったものじゃありません。石でも投げつけられたら、たまらない。肩にかけた釣り道具に往生しながら、登らなくていい岩を登る。だいぶ大回りしました。

潮が引いているとはいえ磯はひざ下まで水があります。靴とズボンが濡れるのを承知で岩から海に飛び降りる。人が入れるぐらいの岩穴があり、60代のご夫婦が下着なのか海水着なのかよくわからない姿でなにか探していました。よく確かめるには失礼だし、たしかめたところでなにか得があるわけでもない。目を外しました。よくこの場所にこれたねえ。こんなところ、探したってなにもいないよ。それどころか、この辺はガンガゼがいるからね。ウニの一種。足にさざったら病院にいかないと抜けないよ。

濡れた岩はすべりやすい。だいじょうぶだろうと思って足をかけた岩はふいに足元をすくう。転倒したら頭や腰を打ちます。こんなところでケガした日には救急車なんか入れません。気をつけてね。

あたしがこの堤防にいきついたのはまったくの偶然です。

ひまにまかせて大根畑の中をあちこち走り回っていました。両足で走ってたわけじゃないよ。バイクです。たまたま他人の別荘の横に出た。遠くに堤防が見えた。人もいる。さて、入り口はどこだ？ちょうど堤防から戻ってきた人に聞いた、というしだいです。

堤防というのは一種独特の場所だね。このXX堤防みたいに、世間からちょっと隔離された堤防はとくにその感がある。ふつうの人は入ってこない。この堤防で出会う人にはなにか、200

0メートル級の山で会ったような感じがするんだよね。ふつう、堤防で人に出会ってもあいさつなんかしないんだけど、自然と、「チワー」という声が出る。不条理な暴力をふるわれて、テトラポットの間に浮かぶハメになってもなんだしね。

「釣れましたかあ？」

「いやあ、いまきたばかりだから」

みたいな会話をする。

なかには釣りそちのけで、車座になって話し込む場合もあるよ。

3年ほど前に会った人がそうだった。ひとりは品川、もうひとりは、どこだったか市川あたりからきた。電話をかけ、

「じゃあ、堤防で」

と落ち合うのだという。

「もともとは4人いたんだよ。みんな、ぐうぜん、この堤防で出会ったんだ」

以来、電話で連絡しあっては堤防に集合することが続いた。

「いや、そのころはさあ、まだこんな堤防なんかできてなかったんだよ。砂浜んところに、ちょこっとしたのがあったの」

そういえば、堤防は2段階に分けてできたような痕跡がある。あとから「建て増し」した跡が見える。10年ぐらい前だという。

「ここに来るのはおれたちぐらいのもんだったよ。なあ、そうだったよな」

もうひとりがうなずく。

「テント張って、堤防の上でキャンプしたこともあったなあ。夜中にタヌキが来てさあ、タヌキ汁にしようって追い掛け回したなあ。ハハハ」

まるで、つげ義春の世界である。

よくこんなさみしい場所でテント張れたね。仲間がいるからできた。ひとりじゃあ、とてもできない。

前はよくこの場所でメバルを釣ってました。メバルは夜行性だからね。日が落ちないとねぐらから出てこない。日が落ちるとふつうの人は家に帰っていく。人が家に帰ると入れ替わりに堤防にきたこともある。堤防の周囲はテトラポットを撒き散らせてある。真っ暗なテトラポットの上で竿振ってたら、雪が降ってきたこともあったなあ。3月です。このときも、26cmぐらいのメバルがきた。

暗い中でテトラポットの上をあっちからこっちへ移動する。足を滑らせたり、バランスを崩したら終わりです。雨が降っている日は特に危ないねえ。右手に竿、左手にバケツ持ってますからねえ。背中ザックがあらぬ方向に動く。バランス崩す。

落ちたら、背中を打つ。脚を折る。頭を打つ。テトラポットの間は波打っています。一度落ちたら、波の力でテトラポットに体を打ちつけられる。ふつうの人は波の力がどんなものかわからないと思うよ。砂浜に立ったとき、足元を濡らす波ぐらいしか知らないと思います。波というか、揺れる水というのはものすごい力があるよオ。力学的なことは知らんけど、チャプチャプした波でも、受ける面積が大きくなると力士に押されたぐらいの力になる。テトラポットの間で、前後左右から力士に押される。

這い上がろうにも、テトラポットには貝やフジツボがすき間なくついている。カミソリの刃がくっついているようなものだ。たちまち、手は血だらけになる。

雪の日に畑の井戸だったか肥溜めだったかに落ちた人の話を聞いたことがあります。もちろん、発見されたときは死んでるんだけど、這い上がろうとしてツメがぜんぶ剥げてたそうです。ツメが剥げ落ちてでもいいから助かりたいと思うんだね。

落ちた拍子に、腕の骨が折れても這い上がれない。足の骨が折れても同じ。やってみればわかるけど、這い上がるには全身の力を使いますからねえ。水が冷たければ、そうこうしているうちに死ぬネ。まさか、テトラポットの間に入人が浮かんでるなんて思わないでしょ。土日以外はめったに入人がこない。土日だって雨が降ったら誰もこないよ。日曜日に落っこちたら、次の土曜まで助けが来ない、とみてよい。

テトラポットの間をのぞきこんでメバル釣っていたら、人が浮かんでた、なんて嫌だねえ。ほかにだれか釣り人がいればいいけどさあ。あたしは携帯持ってないからなあ。大根畑まで出て、人を探しにいかなきゃなんないよ。

「ああ、いっぱい落ちてるよ。そうだなあ、オレなんかこれまでに5人は拾い上げたよ」

海に落ちたのなら泳げば岸にたどりつく。テトラポットの間に入落ちた日には、そもそもテトラポットの間から抜け出るのが大変なのである。

「堤防の上で夜中に酒飲んでたときに、酔っ払って、テトラポットの間に入落ちた仲間いたなあ。頭に大きなたんこぶできて、目の上が切れて、血を流してた」

この堤防ではまだ死人は出ていない。なぜわかるか。死人が出ると、正真正銘の「立ち入り禁止」になるからだ。堤防そのものに金網と鋼鉄製の柵ができる。「三浦警察署」名の警告書がかげられる。網を破って入れれば、「不法侵入」の罪で逮捕です。

それでも入る。金網なんか道具さえあればかんたんに破れますからねえ。ひとたび誰かが穴をあければそこからみんな出入りする。穴があいてるのに入らないテはないよ。ぞうぞ、と喋るようなものだものね。鋼鉄の柵だって、だれかが金ノコで切る。2本も切れば人の体は通れます。現行犯でない限り逮捕はむずかしいからねえ。金ノコで切れなければ鉄柵をよじ登って入る。

テトラポットの間に入落ちて、死なないことですね。自力もしくは他力で這い上がってくる。消防、警察署には連絡しない。

あたしは日曜日を避けていく。日曜日は家族連れなんかがくるんだよね。それも横浜とか都内あたりからくる。遠慮がないというのかなあ。その場所を大事にするっていう気持ちがないんだよね。そういう人と出会うのがいやだ。

このごろは、短い竿を1本もっていく。オキアミをつけて、テトラポットの間に入垂らす。穴釣りというやつです。メバルやカサゴは、昼はテトラポットや岩の間に入隠れています。その目の前にエサをつきつける。穴に入メバルがいれば、いきなり食いついてきます。道糸は2メートルあるかないかぐらい。「ガブリ」が直接、手にくる。いきなりくる。浮き釣りなんかとはまた違う、釣りの楽しさだねえ。

腹がすいたら、ガスストーブ（登山用のガスコンロ）にお湯を沸かす。持っていったインスタントラーメンでお昼です。味噌汁を作り、釣った魚を煮込んで食べる。ネギを少し持っていつ

てね。キャベツの切れはしも持っていく。付近に水はない。水はよぶんに持っていく。ケガしたときに役にたつ。知らない人が多いけど、磯っていうのは雑菌が多いからねえ。ちょっとした切り傷でも菌が入る。きれいな水で洗い流すのがよい。

堤防の上は気持ちいいねえ。だれもない、っていうのがいい。捨て猫がいて擦り寄ってくる。食べ物がないからあばら骨がわかるぐらいやせている。腹をなでると中に子がいる。魚が釣れればくれてやります。彼ら、魚が釣れるのを待っている。竿に魚がかかった瞬間、顔つきが変わる。わかるんだね。釣ったメバルを放り投げてやる。頭は当然だけど内臓まですべて食べ尽くす。メバルは背びれにするどいトゲがある。それも残さず、すべて食べる。感心するねえ。ふだん、食べ物がないから、食べ物を粗末にしないんだね。腹がすいているときは擦り寄ってくるのに、満腹になるとまたテトラポットの間で消えていきます。さすがネコ科です。

夜、釣りをしていると、風の音に乗って、テトラポットの間から猫の鳴き声が聞こえてくる。これがまた不気味に聞こえるんだなあ。

日が落ちる少し前に「夕焼け小焼け」のメロディーが防災無線を使って流される。「よい子は家に帰りましょう」と知らせる。この曲に合わせるかのように、ヨットや漁船が沖から帰ってきます。

日が落ちても夏ならまだ明るさが残っています。夕日の中に富士山の影が見えることもある。海鳥がねぐらへと低空で飛んでいく。

足元が完全に暗くなる前に、止めてあるバイクの所に戻ります。

弁当使い

知人のブログを拝見したら「弁当使い」なることばが出てきた。知らなかったなあ。元編集者失格ですねえ。

「ヘビ使い」じゃないよ。

インターネットを使い、使用例を探してみました。

＜お弁当使い

小さい頃に日曜にはお弁当を持って山や川端にお弁当使いに行ったものです。いまは船でちょこっと走ってお弁当とビールです。きょうは暖かく2隻で走りました＞

「船」というのはヨットのことです。ヨットを2艇並べて走った。そのあとで弁当を使い、ビールを飲んだ。

母親に弁当をこしらえてもらう、あるいは自分で作る。友だちと野に出て食べる。そういうことをいうらしい。ピクニックみたいなものですなあ。

この「弁当使い」、店で売っている弁当では風情がない。やっぱり、母親なり、カミさんに作ってもらったものに限りますね。いや、独身者は自分で作ったっていいのです。

知人のSさんに「弁当使い」のことを問い合わせしてみた。こんな答えがかえってきました。

＜弁当づかいも楽しかったけれど、いつだったか、母親が急にそんなことを言われて、持たせてやれるもののなく、仕方なく、残っていたどじょうの丸煮を弁当にいっぱい詰めてくれたことがありました。1つ2つは食べられても、さすがに弁当いっぱいのだじょうには往生しました。そのときの切ない気持ちはいまでも思い出しますよ＞

いいなあ。幸せだなあ。こういう体験を語れるというのは幸せな人生だと思います。仕出し弁当じゃあ、つまらない。店で買った弁当もつまらない。

「弁当使い」ではないけれど、子どものころ、学校から帰ってお腹がすくと、よく母親におにぎりを作ってもらったものです。

中にはなにも入っていません。

塩をつけてにぎったご飯に、ゴマをまぶす。ストーブの上にワラをパラパラと敷く。その上におにぎりを乗せる。ストーブの熱でワラがこげる。その匂いがおにぎりに移る。ワラと接する部分のおにぎりも少し焦げる。これが香ばしい。ゴマもちょっとこげていい香りがする。

おやつなんかなかったけれど、焼きたてのおにぎりのおいしかったこと。

遠足にもそのおにぎりを持っていきました。新聞紙にくるんで持っていった。お昼になって、新聞紙から取り出したおにぎりは、すっかり冷たくはなっているんだけど、焼けたワラの香りだけはまだ残っているんだなあ。

おにぎりに味噌をつけたのもおいしかった。これもおやつ代わりです。

ワラなんて、いまではホームセンターにでもいかなければ手に入りません。きれいに切断されたのが、ビニールの袋に入って売られています。500円ぐらいです。マキストーブもぜいたく品になってしまったねえ。ごていねいにマキまで売っています。そりゃあそうだ。マキなんて容易には手に入りませんからねえ。

ワラもマキストーブも生活とはかけ離れている。趣味の世界です。

たんぼにはドジョウもタニシもたくさんいた。野ガモがたんぼでヒナをかえし、稲穂の間を泳ぎまわっていた。サランラップもアルミホイルもなかった。父親の読み終わった新聞が弁当の包みであり、おにぎりの包みだった。ついでに言えば、広告の裏が漢字の練習帳だった。母親は家にあるものをつかって食事に工夫をこらしていました。

いま思うと、あの焼きおにぎりのおいしさは母親の愛情だったのですねえ。

革靴のこと

電子メールをチェックしていたら、

「おめでとうございます！300万円が当たりました！」

というのが届いていました。まさかねえ、そんなの本気にする人いるわけないでしょう。

そんなこと、電子メールを送りつけたほうだって承知のうえです。

本気にはしないけれど、どれ、ちょっとのぞいてみようか、と思うぐらいの人はいるかもしれませんが。そこがねらい目なのである。

あたしはのぞきませんでした。

それで思い出した。

私が中学1年生ぐらいのころだったと思う。

父に1通の手紙が届いた。いなかだもんねえ、お役所からくるのは別にして、個人名で手紙がくるなんてことはめったにありません。それも東京からです。

中をあけ、父が興奮した口調でいう。

「カメラが当たった！」

読ませてもらう。

「おめでとうございます！あなたにカメラが当たりました！」

なんでも、新聞にクイズが載っていて、それに応募すればカメラがあたる、と書いてあったそうなので、父はさっそくそのクイズに応募した。どうせ、誰にでもわかる、かんたんなクイズだったんでしょうよ。目的は「住所集め」だもんね。

「おめでとうございます！」には、ごていねいにカメラの写真まで掲載してある。それはりっぱなカメラです。昭和30年代でカメラを持っている人なんて、あたしの部落でも、そんな人もいません。そもそもカメラ屋なんかなくて、写真の現像は薬屋に出したもんです。現像に使う薬品は薬屋で売ってますからねえ。薬屋のご主人が自分で現像したのでしょうか。もちろん、白黒ですよ。カラーフィルムなんて、売ってなかった。

「おめでとう……」を、さらに読むと、

「革靴を買おうと……」

という、「ただし書き」がついているじゃありませんか。

ことばを整理すれば、

「革靴を買えば、おまけでカメラをつけてあげますよ」

ということになる。なあ～んだ、である。

父は、

「革靴よりもカメラのほうが高い」

の一点張りである。

母は、

「そんなのうそに決まってる」

と、なかなかするどい。女は現実的ですからねえ。

母がそういうのももっともで、父には前科があるのだ。

「今度、通帳のいらぬ新しい貯金が出来た」

そういって、父はまんまと金を取られた過去があるのだ。「通帳のいらぬ貯金」なんてあるわけないのにねえ。ちょっと考えればわかりそうなものを、人がいいんだねえ。

さて、カメラが届いた。革靴も届いた。

カメラは中学生のあたしが見ても、怪しい代物です。外見は高級一眼レフカメラそっくりです。持った感じは、とにかく軽い。それもそのはずで、すべてプラスチックでできている。そういえば、チラと見た革靴もなんとなく、人工皮革のような感じで、テカテカしておる。

レンズは取り外し不可。というかボディにくっついておる。焦点は固定。つまりピント合わせ不要っていうわけです。ピント合わせしようにも、一眼レフ必須のミラーがないのだから、合わせようがない。たしか、「曇り」か「晴れ」のどちらかが選べるようになっていた。「曇り」ならレンズ開放、「晴れ」なら絞る。シャッタースピードは固定です。レンズまでプラスチックです。でも、ちょっと離れて見るとなんとなく高級感があるんですよ。デザインの力ですねえ。これを写真で見せたら、まさかこんな代物が届くとはどなたも思わないでしょう。詐欺と髪一重だね。

そのカメラで写真を撮った記憶はない。だから、ほんとうに写るかどうかの確証はない。たぶん、写るでしょう。どう、写るかは別として。

中学時代のあたしは電子工作や機械いじりに夢中で、写真のほうはまったく興味がありませんでした。

その後、カメラも革靴のこともすっかり忘れていました。

20年ほど時がたち、私は東京で働いていた。出版社に勤め、縁があって、大学時代のクラスメイトと結婚することになった。

さて、結婚式にやってきた父の足元を見ると、なんだか見覚えのある黒い革靴を履いていたのである。

学校に「怪力男」がやってきた。小学校2年生のころだから、昭和36年のハナシである。いまの人にもわかるように直すと1961年である。

とにかく娯楽というものがなかった。家にはラジオもテレビもない。ウチだけじゃないよ。みんなナイのである。

夏になると村に「巡回映画」なるものがやってきた。学校の講堂を使う。あらかじめ券を買っておく。早い人は3時間以上も前からやってきた。ゴザや座布団を敷いて、その上でゆでたトウモロコシやおにぎりを食べる。場所だけとって人がいない場合、ゴザは移動させられる。あとで大喧嘩である。

卓球台の上に映写機を据える。映写機なんて初めて見た。丸くて大きい輪っかがふたつついていて、それが規則的な音をたてて回る。一方の輪から送り出されたフィルムが映写機をくぐり、もう一方の輪に巻き取られる。映画が映しだされる仕組みがよーくわかった。学校の理科の時間よりも勉強になった。

いつもは校長先生が立つ場所に白いスクリーンが垂れ下がっている。

小手調べにニュース映画をやる。「安保反対！」を叫んで行進するデモ隊の上に狼の黒い横顔が映る。もう一匹の狼が現れけんかになる。蝶々が飛ぶ。手だけが1本映る。しかられる。しかられてもやる。黒い頭が画面を横切る。見えないよ！誰かがどなる。

講堂には冷房も送風機もない。暑くて息がつまりそうである。外は真っ暗である。暗幕を張る必要がない。窓が開けられ、暗幕の間から風が吹き込む。

映画は『ヨツヤカイダン』である。「階段が4つ」ってどんなハナシなんだろう。

『四谷怪談』である。ユウレイが出てくる。貧しい武士が、おのれの出世のために、妻に毒を盛る。妻の名を「お岩」という。これから寝ようというときに、お岩は鏡の前で髪の毛にくしを入れる。髪の毛が大量に抜ける。驚いた女は振り向いて夫を見る。目の上がこぶのように腫れあがっている。顔がお化けである。武士は驚き、お尻であとずさりする。切って川に捨てる。井戸だったかもしれない。武士は新しい妻をめとり、出世する。同時に、夜になるとお岩が現れる。お岩は武士にしか見えない。見えないお岩に武士は刀を振るう。アタマがおかしくなっていく。

まあ、なにか教訓を引き出すとすれば、「糟糠の妻は大事にきなさいよ」というモンだろうか。

学校の敷地は元は墓場だった場所である。そこで『四谷怪談』をやる。これ以上のロケーションはないよ。そのうちトイレにいきたくなる。トイレは男女兼用である。通路をはさみ、男性用と平行して女子用が10個ぐらい並んでいる。いっておくけど水洗じゃないよ。暗い穴がのぞいているんだよ。そこにまたがるわけ。

天井は梁がむき出しである。そこから裸電球がぶら下がっている。いちばん端の個室なんか、灯りからもっとも遠い。「お岩」を見たあとだよ。近づく勇氣はない。

ションをしながら振り返る。背後の個室のドアがほんのちょっとだけ開いてる。ちゃんと閉めとけよな、と思う。誰かがのぞいているような感じがする。ションを半分だけがまんして逃げる

ようにトイレから戻った。

もう1本は『オーイ中村君』だった。植木等のヒット曲に便乗して作られた、まあ、スチャラカな代物です。上映中よくフィルムが切れた。再開したときには途中がすっ飛んでいる。ますますハナシが繋がらない。文句をいっても通じない。植木等もいいかげんだけど、上映そのものもいいかげんなものです。

映画が終わってさて家に帰るんだけど、我が家までのわずか50メートルほどの距離が非常に怖かった。街灯なんてないんだからね。隣の人の顔さえわからないぐらい暗い。

で、「怪力男」のほう。

朝、全学年が講堂に集められた。授業を中断してまで「怪力男」のパフォーマンスを見ようってんだから、いま考えたらすいごねえ。有名人でもなんでもないよ。そりゃあ、本人は売り込みにあたってさまざまな経歴を捏造してるかも知れんけど、子どもが知っているのは「怪傑ハリマオ」ぐらいだもんね。ともかく、校長がそれを判断した。それだけ、おとなも子どもも娯楽に飢えていた。そういうパフォーマンスを見せるのも情操教育の一環として悪くはないだろう、と校長が判断したわけだ。勉強ばかりじゃ、楽しくないもんね。

「怪力男」はいま考えたら、大道芸人みたいなものです。映画、『道』をごらんになったことがあるだろうか。アンソニー・クイーン扮するザンパーノを思い浮かべてもらおうとよろしい。

ちょっと知恵の足りない（ほんとうはザンパーノのほうがタリナイんだけど）ジェルソミーナを連れて男は大道芸の旅を回る。胸に鎖を巻きつけ、いまからこの鎖を胸の筋肉で切って見せる！とほえる。ジェルソミーナのドラムロールが終わると同時に太い鎖がプツリと切れる。拍手。ジェルソミーナが満面の愛想を見せ、帽子を手に投げ銭を集めて回る。ふたりはバイクを改造した3輪自動車に乗って次の街へ移動する。というハナシである。結末を見て涙を流さない人がいたらメールください。

ハナシが横にそれた。

校長が怪力男およびパフォーマンスの意義だったかなんだかをひとくさりしゃべり、怪力男を紹介する。男は上半身裸である。それはまありっぱな筋肉です。女の子はともかく、おなご先生たちは厚い胸の筋肉にほれほれしたでしょうねえ。あたしはハナをすすりながら、それを見ました。

男の背後には女性がひとり控えていた。ジェルソミーナのような愛嬌も物悲しさもない。ふつうの女性です。たぶん、内妻かなんかでしょう。

男は女性から手渡された1本の鉄の鎖をみんなに見せた。

「これは、けさ、○○商店から買ってきたばかりの新品の鎖です」

「○○商店」というのは部落に1件だけある金物店の名前である。その次男坊が同じ学年にいた。「○○商店」のところで場内がちょっとザワついた。

「いまからこの鎖を私のこの胸の筋肉で切って見せます」

ますます、ザンパーノである。

「その前に、鎖になんのトリックもないことを証明するために、体育の先生に鎖が切れるかどうか試してもらいます」

鎖とって犬をつなぐような鎖ではない。自動車ぐらいはかんたんに引っ張れるような鎖である。

鎖を渡された先生は力の限り引っ張って見る。切れるわけがない。男の手で切れるぐらいなら最初から渡さない。鎖以外になにか仕掛けがあるのだ。

体育の先生はちょっと恥ずかしそうにしながら、鎖を元の持ち主に戻した。

「どうですか、学校一の力自慢を誇る体育の先生をもってしてもこの鎖は切れませんでした。これでこの鎖が新品であるということを証明したと思います」

男はだいたいそんなことを述べた。そこでまたザワついた。

男は、ケガをしないといけないから、とかなんとかいって、女に手伝ってもらい、体にオイルのようなものを塗りつけた。胸に鎖を巻きつけてもらう。南京錠を使い鎖を留める。いま考えたらこれがクサイね。女が南京錠をかけるときに、ハンダかなにか軟らかい金属で作った、ニセモノの輪をひとつまぎれこせるんだろうね。

さて、始めるのかと思ったら、パワーをつけるために、とかなんとかいって、女から小さなビンに入った液体をもらった。それを飲むとより力が増すのだという。いまでいう筋肉増強剤みたいなもんだけど、実際はただの水だったと思うよ。飲んですぐに効果を発揮するなんてありえないもんね。

小瓶の液体を飲み終え、男は大きな声を出した。ドラムロールなしである。鎖は切れ、男は切れた鎖を上げて見せた。全校生徒の拍手。男はおじぎをして壇を下りた。ショーは終わってみればなんともあっけない。感動は残らなかった。

私たちはまた隊列を組みながら教室まで戻った。

男と女は校長室に招かれ、お茶をいただいたあとでいくばくかの謝礼をもらったことだろう。彼らはそうやって日本中の小学校や公民館を回っていたのであろうか。毎日、ショーができるわけでもないだろう。交通費や宿代、食費を考えたら、よく生活できるものだと思う。

映画『道』が作られたのは1954年である。もしかしたら、あの「怪力男」は生活の糧を『道』にヒントを得たのかもしれない。

人々がまだ純真で、娯楽も少なかったから成り立った。

ラジオで...

ラジオで作文を読んだことがある。小学校1年のときである。

(以下、えんえんと自慢話が続きます)。

学校に入ってまもなく作文を書かせられた。私は日曜日に、叔父のりんご園でりんごの収穫を手伝ったときのことを話題に選んだ。

(続きは「有料版」で・・・)

海亀の産卵

テレビで海亀の産卵をやっていた。私は定食屋で夕食を食べながらそのテレビを見ていた。20代の頃である。

テレビは店の隅にあり、頭を上に向けないと見えない。テレビについた油に、ほこりがかたまり元の色がわからなくなっている。

産卵場所は忘れた。まいとし、決まった時期、決まった場所に海亀はやってくるのだという。後ろ足で砂をかき、穴を掘る。砂がカメラに向かって飛んでくる。ピンポン玉大の白いタマゴが穴の中に産み落とされる。ひとつ落ちてはまたひとつ。1匹の亀で50個だったか100個だったか忘れたが、かなりの数のタマゴを産む。

「海亀はタマゴを生むとき、涙を流すんです」

男のアナウンサーがいった。カメラがその涙を大映しにしていた。

海亀はタマゴを生み終えた穴に後ろ足で砂のふたをする。そしてまた海に戻っていく。砂の上には甲羅を引きずった跡が波打ち際まで続いている。

数週間してタマゴは孵る。

夜明け前、平らだった砂の一部がとつぜん、動く。砂が盛り上がり、中から小さな亀が頭を出した。砂が崩れ、体全体が砂浜の上に現れた。小さくておもちゃみたいである。子亀は地上に出た瞬間、ためらうことなく海へ向かう。産まれる前から、どちらが海でどちらが山かわかっているみたいである。

小さな手足が、まるで誰かに追われているかのように、休むことなく動く。砂浜にはほかにも同じように手足を動かしている子亀がいる。

「砂から出たばかりなのに、どうして、どっちが海でどっちが山なのかわかるんでしょうねえ」

女のアナウンサーがいった。

「そうですね。不思議ですねえ。本能なんじゃないかなえ」

「それにしても健気ですね。みんながんばって！」

女のアナウンサーがいった。ふたりは声がするだけで顔は見えない。

カメラは最初の子亀が出た穴を映していた。穴はすり鉢状になっている。砂の斜面を子亀が上ろうとしていた。足で砂をかくたびに砂が下に落ちる。砂が落ちていくだけで体はちっとも前へ進まない。次の子亀が頭を出す。その亀に落ちた砂がかかる。続く子亀は降りかかる砂をもともせず穴の底から這い出ようとする。すぐにその次の子亀が顔を出す。最初の子亀の後ろ足が2番めの子亀の頭を踏みつける。子亀はその足を頭で押し上げる。おかげで最初の子亀はすり鉢の斜面を上ることができた。3番目の子亀は彼らとは別の方角へ斜面を上る。砂の中からわいてくるみたいに子亀が顔を出す。子亀が顔を出すたびに逆に砂が下に落ちていき、すり鉢はますます深く、大きくなっていく。あとから出てくるほど不利である。斜面でもがくもの。せっかく上った斜面をずり落ちていくもの。落ちてきた子亀を足場に上にあがろうとするもの。あと1歩のところまで穴から出ようとするときに、後ろにひっくり返って穴の底に落ちていくもの。すり鉢の中はいまや阿鼻叫喚の世界である。

「みんな必死ですね」

男のアナウンサーがいう。

砂浜は一面、子亀だらけである。波打ち際を目指して、みな、兵隊のように突進する。

子亀が暗い中で海へ急ぐ理由を、男のアナウンサーが説明した。

砂浜が明るくなると、鳥がやってきて彼らを食べてしまう。だから子亀は彼らに見つかる前になにがなんでも水の中に入ってしまわなくてはならないのだ。

岩の上や木の上に黒い、鳥の影が見える。

水際に到達した子亀は押し寄せる波に体を預ける。波が引くと同時に一気に海の中に消えていく。波がよせたときにうまく波に乗れずひっくり返っている子亀もいる。

「あらあら、ひっくり返っちゃったわ」

「こうやって無事に海に戻っていても、数十年後に親亀としてここに戻ってこれるのは100匹に1匹か2匹だそうですよ」

男のアナウンサーがいった。

あたりがうっすらと明るくなった。

鳥がいっせいになきだした。砂浜の子亀をくわえて空中に飛び立つ。すり鉢から出ようとしていた子亀をくわえる。鳥のくちばしに捕らえられる仲間を尻目にほかの子亀は海をめざす。寄せる波は「おいで、おいで」をしているみたいだ。歩みの遅い子亀の上を別の子亀が乗り越えていく。ひっくりかえったまま両手足を動かしている亀もいる。

私はとっくに食事を終えていたが、店を出る気にはなれなかった。店主はテレビに背を向け、調理場でなにかあと片づけをしていた。もうひとりいた客は食事をしながら新聞を見ていた。私は店主が番組を変えなければいいが、と思った。店主はときどき、野球に合わせてチャンネルを変えることがあるのだ。

この店ではコロッケや焼き魚、豆腐、ほうれん草、サラダなどがガラスケースの中に並んでいる。ご飯と味噌汁のほかに、それらの惣菜を自由に選べる。いつもソバやうどんだけでは栄養がかたよる。私は仕事を終えたあと、夕食はいつもこの店で取ることにしていた。

店は商店街から外れた場所にある。駅に行く道からも外れている。おかげでいつも空いている。値段も安い。私がアパートへ向かうにはちょうど通り道になる。私はテレビを持っていない。新聞もとっていない。たいてい、この店でテレビをちょっと見、新聞を広げてからアパートに帰る。

砂浜は完全に明るくなった。それでもまだ子亀たちは海をめざして駆けている。小さな鳥の姿も見える。

「甲羅がまだ軟らかいので、かんたんにつかまってしまうんですねえ」

男の声がする。

そのことばどおり、小さな鳥が数羽、一匹の子亀をくちばしでつついている。

太陽が完全に顔を出した。砂浜や海には、どこにこれほど鳥がいたんだろうと思うぐらいの鳥が宙を舞っている。

一匹だけ、海とは逆の方角を目指している子亀がいた。カメラはそれを映した。

「おや、一匹だけ海とは逆の方向に向かって歩いている子亀がいますね」

男がいった。

「おいおい、そっちは海じゃありませんよ」

撮影スタッフのひとりだろうか、手がのびて子亀の頭を海のほうに向けた。子亀はしばらく与えられた向きに歩いた。すぐにまた方向を変える。

砂浜はゆるやかな上りである。海に向かうよりきつい。その先は草地で松林になっている。さらに先は道路が通っており、山になっている。カメラはそれを映した。

子亀の向きをもういちど変える。同じことである。子亀はまた砂浜を上る。

「あら、どうしちゃんったんでしょね、この亀ちゃん」

女がいった。

「ほんとにどうしたんでしょね。海にはいきたくないんでしょかね」

そこでふたりはほぼ同時に小さく笑った。

子亀はそんな声が聞こえているのかいないのか、小さな頭を前に突き出し懸命に手足を動かしている。ほかの仲間は海をめざして生きるか死ぬかのレースを繰り広げている。子亀はそんなものなど目に入らないかのようである。気温が上がれば死んでしまう。

「このままでは鳥に襲われなくてもいずれ死んでしまいますね」

女も私と同じことを考えていた。

続けて男がいった。

「どこの世界にもいるんですよねえ。こういう変なのが」

私は、いつもそうしているように定食代をテーブルの上に置いて店を出た。

<つづく>

山の上でおもしろい人に出会った。

うちの近所に100メートルにも満たないような山がある（100メートルにも満たないのに山っていいのかしら？）。戦時中は軍がこの山を走り回っていた。戦後は米軍が取り仕切っていた。いまは山全体が公園になっている。1年中花を楽しめる。展望台があり、東京湾行き来する船が望める。振り返れば富士山が見える。いいところです。

基本的に私はヒマなものだから、天気さえよければここを歩き回っている。文字で書くとかたんに聞こえるけど、我が家から展望台まで片道5キロです。とちゅう、知り合いでも、なんでもない人をつかまえてくっちゃべったりしているものだから、場合によっては朝の6時に家を出て、帰ってくると10時過ぎていることもある。まあ、ちょっとした遠足です。そう、出かける前にはりんご1個にクッキーを多少持っていく。朝ごはん代わりです。デジカメも持っていく。カメラを持っていかないときに限っていい被写体が現れる。なんと悔しい思いをしたことか。

いつものように、展望台で、目の前に広がる光景を撮っておりました。入船、出船、それらを横切る東京湾フェリー、ヨットなど、手を伸ばせば届きそうなぐらいの距離に見えます。

その人は1月だというのに半そでシャツで展望台を駆け上ってきた。年のころは50代なかばといったところでしょうか。聞くと、下の駐車場から駆けてきたという。1キロある。歩いて上るのだってそうとう、しんどいよ。

「元気ですねえ。寒くないですか？」

「いやあ、寒くなんかあないよ。むしろ暑いくらいだ」

男の人は私が持っていたカメラに目を留めた。

「それ、デジカメ？」

私が使っているのは4年ほど前に買った、ちょっと古いデジカメである。

「デジカメじゃあ、写真はうまくならないよ。写真がうまくなろうと思ったら、カメラはアナログでなきゃ。フィルムはモノクロを使んだね」

なんでデジカメじゃあ、写真はうまくならないの？

「写真の上手下手は投資の量だよ」

なんだかよくわからないことをいう。

「ほら、デジカメでいくらシャッター切ったって、1円も金がかからないだろ？電池がちょっと減るぐらいじゃない。そこへいくと、アナログカメラの場合、そうだなあ、1回シャッター押すごとに、確実に20円ぐらい消費していくことになる。フィルム1本、800円、36枚撮りとしてサ」

たしかに。

「それを現像に出してごらんよ。さらに金がかかる。モノクロの場合、最初にベタ焼きをして、そこからいいコマを何枚か選んで焼く。上がってきたプリントからさらに選んで6つ切りなんかにごらんよ。フィルム1本で確実に1万円は飛ぶよ。あたしなんか、フィルム4本現像して、2万円払って、あがってきたベタを全部捨てたこともあるモン。そんなこと考えたらサ、うかつにシャッターなんかきれないヨオ。シャッター押すんだって真剣勝負だよ。プロボクサーが

渾身の力をこめて1発ぶちかますぐらいの真剣さが必要なんだよ」

男はそこで、ボクサーがパンチをかますしぐさをして見せた。

「写真がうまくなろうと思ったら授業料払わなきゃ。投資だよ。時間的な投資も含めてさ。投資したからにはそれを回収しようっていう気持ちで写真を撮るんじゃあないかあ。最近の人はさあ、自分に投資するんじゃなくて、カメラそのものに投資してるんだよねえ。すぐにちょっとでもいいカメラ買おうとするでしょ。いい写真が撮れないのはカメラがよくないせいだと思っちゃう。そんなこたあないよ」

「そうですねえ、たしかに。ボクなんかも囲碁やってるんだけど、囲碁には相当な時間を投資してますよ。時間をかけて研究しないと強くならない」

私のいうことばなどまったく耳に入らぬふうで続ける。

「カメラのシャッターつうのは銃の引き金を引くのとおんなじようなもんなんだよ。やたらと撃っちゃいけないんだよ。ねらってねらって最後に引き金を引く。確実に仕留める。失敗は許されないんだよ。けど、デジカメ持って歩いている人はやたらにパンパン撃ちまくるんだよなあ。失敗したらあとでパソコンで修正すればいいや、なんて思っている。そういう根性じゃあ、写真はうまくならない」

男はそこで、展望台から下の向かって、ペツとつばを吐いた。

「写真ツうのはさあ、偶然が写り込むでしょ。現像してみて、初めて、あれー？こんなも写ってる、っていうことがある。でもさあ、それがいい場合もあるんだよねえ。アナログだといちど写りこんじまったものはあとから取り除けない。でもさあ、デジタルだと消せるんだよね。電線なんかでもかんたんに消せる。あとからなんとかなる、っている安直さが写真をあまくするんだろうねえ」

いうことがいちいちごもつとも。心当たりがある。

「まあ、こういっちゃあ、なんだけど、なににレンズを向けているかを見るだけで、だいたいその人の腕がわかるね」

展望台で眼下の景色を写したり、花の写真をクローズアップで写しているような人は、写した写真を見るまでもない、そうである。

「写真ツうのはさ、それを写した人にとってはそこに思い出が写ってるんだよ。苦労して高い山に登って写した花の写真には、そのときの苦労とか、山の空気のすがすがしさだとか、一緒に上った人たちとの思い出が写っている。でもさあ、それを見せられるほうには、そんな思い出なんかないでしょ。目の前にあるのは単に花の写真。なんでこれがいいの？って思っちゃう。見せるほうには思い出がくっついてるかもしれないけど、みせられるほうには思い出はくっついていない」

それにしてもよくしゃべる。初対面にもかかわらず、相手に遠慮がない。いわれた相手が違っていたら、その場で取っ組み合いになってもおかしくない。

このままここにいたら、1時間でも2時間でも話を聞かされそうな気がしてきた。相手がひと呼吸ついたところで私はいった。

「それじゃあ、またどこかでお会いしましょう」

駐車場に降りる道の途中に寒椿が咲いていた。撮影モードをマクロに切り替え、クローズアップにする。花の雄しべと雌しべがはっきり見える。

背後を誰かが駆け抜けていった。見ると、さっきの男が駆けていく姿が見えた。

人々がまだ石のナイフを使っていたころ、おそらく、こう思った。

「もっと切れるナイフがほしいなあ」

鉄の発見によってその願いは叶った。

そのナイフはよく切れる。へたすると自分の手を切ってしまう。感情の使い方を間違えると、人まで切ってしまいかねない。

道具というのはすべてそういうものだと思う。

目には見えないが、

「取り扱い注意！」

のラベルが貼ってある。

現時点で最新の「ナイフ」に相当する、携帯電話やインターネット、電子書籍（ブック）にもすべて同様の「ラベル」が貼られている。

電子書籍に関してはずいぶん前、それこそインターネットが普及する前からさまざまな企画品が現れては消えていった。インターネット上で本が読めるしくみも、いわゆる「電子書籍」の親戚には違いない。持ち運べるかそうでないかはハードウェアに依存する。ノートパソコンなら運べるし、デスクトップならちょっとむりだ。

個人が1冊の本を手にするまでには、そこにどれだけの技術と労力が加えられているか想像がつくだろうか。出版業界にいた人間でなければその労力は想像もつかないと思う。

著者から原稿をもらう。その原稿から入稿用の原稿を起こす。デザインをくわえる。文字を組む。版を起こす。版にインクをつけ、仮印刷をする。それを校正する。修正する。大量に印刷する。製本する。各書店に配布する。

ごくごくかんたんに書いた。実際にはこんなものじゃあない。 だいたい、著者が書いてくる原稿そのものが読めない。そのままでは使いものにならない。本来は漢字で書く部分をカタカナで書き、「漢字に直す」と注釈がついている原稿など珍しくもない。なにに対して原稿料払っているのかわからなくなる。著者の思い違い、事実の誤認など、くさるほどある。いちどもらった原稿を著者につつかえしたことだってある。印刷所が原稿を紛失したこともある。添付のイラストや写真がなくなる。会社に泊まりこみ、徹夜で原稿を仕上げる。始発電車で印刷所に持ち込んだことは数知れず、である。こちら、気が短い。著者や印刷所となんども喧嘩した。

電子書籍化することによってそういう労力が多少とも減る。少なくとも印刷所と製本所は不要になる。「インキ」、「紙」、「印刷機」、「製本機」は確実に消える。出版には不可欠だったこれらのものが不要になるとは、すごいことだ。本を輸送しなくていい。ガソリンやトラックが不要である。

グーテンベルクが活版印刷を発明してからおよそ100年がたつ。ワープロが普及し始めてだっておよそ30年ぐらいだろうか。原稿をデータで入稿し、それをパソコンで文字組みし始めたのだからここ15、6年でしょう。100年かかって完成された印刷技術が、この15、6年の間に革命的に変化している。文字が活版から電算写植に移行された当初、「こんな文字は魅力がない」だの「使えない」だのさんざんいわれた。いま、「活版」ということばさえ死語です。そ

こへきて今度はハードである本さえも電子書籍化されようとしている。そのうち、電子書籍さえも不要になるんだらうね。書籍を脳ミソに直接送ってもらえばいい。電車に乗りながら目を閉じて本を読めます（電車そのものがまだあるかわかりませんが）。いや、文字そのものが消えるかも。人は文字を介さずに情報を交換する。意思を伝え合う。

いい忘れた。上記で、書店に並んだ本がすべて売ればいいが、そうでない場合は、せっかく並んだ本は逆のルートで版元（出版社）に戻ってくるのである。これを返品という。返品率60%なんていう本まで存在する。10冊のうち6冊は売れずに戻ってくるのである。まったく、労力と資源の無駄です。

電子書籍化によって図書館が不要になる。「電子図書館」にとってかわられる。過去のものはともかく、今後、世に出るものは電子図書館入りになる。

「増刷」という概念はなくなる。「改定」が楽になる。現にいまあなたが読んでいるこのハナシにしたって、なんと、改定されたことか。

出版メディアにかかわる人間の数が少なくてよくなる。人間が少なくてよいのだから、その分、食料も生産しなくてよい。

いや、あくまでも出版メディアに限定しての話ですよ。

じゃあ、なんでもっと早くから電子書籍が普及しなかったのか。ソフトとハードとの供給のバランスの問題です。

「ソフト」というのは著者が書いた原稿である。「内容」です。「ハード」はそれを収めている「本」のことである。「本＝ハード」は紙でできていても「電子書籍」でできていてもいい。なんだったら、ロゼッタストーンのように「石」でできていたっていいんです。

「ハード」がなんであれ、おもしろいものはおもしろい。役にたつものは役にたつ。「小鳥の飼い方」が紙の本に書いていなければならない理由はない。紙がなかった時代、仏の尊（たつと）い教えは木の板に書いてあった。キリストの教えは羊皮紙に書いてあった。おかげでいまでも読める。「イノシシのじょうずな捕まえ方」が石に刻んであってもいい。石斧でイノシシを追う暮らしをしていた人たちは回し読みしたのであろう（文字が読めたらハナシ）。仮にいまその石が残っていたとしても、少なくとも、紙に書かれた『我輩は猫である』ほどには読まれないであらう。

「ハード」がなんでできているかはそんなに重要ではない。ハードにはある程度の利便性があればいい。「ソフト」のほうに実用性なり、おもしろさがないといけないのである。

砂に書かれた愛の告白はたしかにロマンチックではあるけど、「愛の告白」を紙飛行機に折って相手の家の窓から投げ込んだほうがもっと衝撃的かもしれない。これらは「演出」の問題であって、当面の話題とはまた別のハナシである。

電子書籍で『我輩は猫である』が読めるからといって、すぐに電子書籍に手を出す人がいないのはそういう理由である。20数万円もするパソコンを買ってまでYouTubeを見ようとするのも同じ理由である。

最近の電子書籍はちょっと事情が違いうらしい。なにが違うのか。著者に支払われる印税の割合が違うのである。本の場合、著者に支払われる印税はよくて定価の10%、著者に力がないと6%

ぐらいも場合もある。最新の電子ブック、アマゾンの「キンドル」の場合、著者に支払われる印税は定価の70%であるという。問題はソフトの販売価格である。定価300円ならたいしたことはない。あとは発行部数である。定価

× 発行部数 ×

印税が著者の利益となる。紙の本の場合、「初版保証部数5000部」なんていう条件がつく。売れても売れなくても「5000部の印税は保証します」という約束である。

それにしても70%は大きい。単純に、紙の場合の7倍である。こりゃあ、やる気が出る。出版のハードルが下がったぶん、サンデー・ライター（日曜作家）でも本が出せそうな気になる。

ある著者の書いたものが最初から電子書籍の形態でしか販売されないとしたら、いくら、

「オレは紙の本でしか読まねえ！」

と豪語したところで、そもそも紙の本が存在しなければ、読みようがない。遠からず新聞だってそうになってしまうだろう。朝4時前に起きて、雨の日も雪の日も自転車に乗って配って歩くなって、労力のムダ以外のなにものでもない。

かくしてペーパー派は時代から取り残されるのである。まあ、取り残されるどころか、そのころには本を読む元気もなくなっているだろうけれどね。

幼稚園や小学校では最初から電子書籍を手にとらせる。

「ページをめくる快感」なんていうことばは死語になる。そもそもページをめくったことがないのだからねえ。死語にならなくたって意味が変わる。同じ「ページ」でも、紙の本のページとpdfやWordの「ページ」ではそもそも実態が違うようにである。「ページをめくる」ということばは、ページをめくる行為が存在するからあるのだ。行為がなくなればことばは消える。「でも、あたしはやっぱりページをめくる派だなあ」といっている人は、ちょうど、「あたしはやっぱり腰巻のほうがいいねえ」というバアさんとなにも変わらない。腰巻のよさ、ページの存在のよさを知っている人の発言である。うちの娘など最初から腰巻の存在自体知らない。

「ページをめくる快感」ないしは「ポケットに文庫本をねじこむ快感」をうんぬんできるのは、それを体験しているからである。ある読書体験に郷愁がくっついている。生まれながらにして電子書籍を与えられた世代はそんなこだわりも郷愁もない。

「なんですか、それ？」

ってなもんである。どうやったら勝てません。

「ソフト」が読者を満足させてくれるものであれば、読者は「ハード」のことは忘れていく。ほんとうにおもしろいハナシを読んでいるときはそれが石に書かれているか紙に書かれているかは気にしていないものだ。

けっきょくはそこのところに落ち着く。

朝顔の観察日誌

小学校4年生のときである。夏休みにはいつの間もないある日、ぼんやりと校庭を歩いていた。急に、校舎の2階の窓があく音がした。

「りんご丸くーん、ちょっと上げてきて！」

担任の女の先生が見えた。

なんだろう？上履きは家に置いてある。私は、誰もいない校舎に素足で上がった。

(続きは「有料版」で)

「過去の自分に励まされる」といういいかたがある。古い日記を見ていて、そのことばを思いだした。

20代のころはこれでも人並み以上に体力があった。最初に入った大学では「ワングル」にいた。山登りのサークルです。昼間仕事をし、夜、授業に出る。授業のあとでトレーニングをする。腕立て伏せ、うさぎ跳び、すべて100回が基本である。校舎の非常階段を3階までなんども往復した。高校時代はボート部に所属していた。ボート部のきつさに比べたら、どうということはない。しょせんは遊びである。いやになったらいつでも止められる。

大学に入る前は新聞配達をしながら専門学校に通っていた。毎朝3時半に起きる。雨が降っても雪がふっても自転車で新聞を配る。朝夕刊の配達のほかには集金が伴う。独身者はいついってもいない。いちどでお金がもらえることはまずない。こちらのきつさは遊びではない。

大学に行こうと決めて、新聞配達のほかには昼は喫茶店で働いた。2ヶ月めだった。疲労が極度に達して、朝、起き上がれなくなった。高熱が出た。それまで生きてきた中で初めて「体が壊れた」と感じた。次に目を覚ましたとき、仲間に尋ねた。

「きょうは何曜日だ」

私は3日目の朝に起き上がることができた。おかげで体力は元に戻った。働いて貯めたお金をかき集め、郵便局にいった。その日が入学金の振込み締切日である。郵便局が閉まる10分前に窓口についた。

「まだ間に合いますか？」

「だいじょうぶですよ」

窓口の女性が笑ながらいつてくれた。

一円玉まで混ぜっていた。

夏合宿で1週間山にこもった。山から下りて、そのまま大学の事務局に退学届けを出しにいった。

「君はやめるのが早いねえ」

あきれたようにいわれた。私にも考えるところがあったのである。

2年後、別の大学に入った。ここでもまた悲惨な体力勝負が待っていた。大学に行きながら、フリーランスのライターをしていた。徹夜で原稿を書きあげ、会社からそのまま大学に行くこともしばしばあった。眠るまいと教室の最前列に席を取る。睡魔には勝てない。授業が終わり、イスがたてる音で目をさます。教室から次の取材に出かける。夕方、学校に戻って別の授業を受ける。アパートに帰ってからは真夜中、チラシ配りをした。

大学を卒業し小さな出版社に入った。定期券の支給を受けるも使う機会がない。仕事が終わるころには電車はすでにはない。広尾から恵比寿を経由し、目黒のアパートまで歩いて帰った。アパートに着いたころには2時近くになっている。9時出勤なので朝はタクシーに乗らざるをえない。アパートから駅まで歩いて30分はかかる。とても会社にまにあわない。タクシー代が続かない。朝、タクシーを拾っていた女の人に、

「途中まで一緒に乗りませんか」

とずうずうしく声をかけたことがなにかある。

このころの日記には、「土曜日に出勤し、日曜日の夕方に帰宅する」、「土曜日の朝がた帰宅し、目が覚めたら月曜の朝だった」という記述がある。すっかり忘れていた。あのころの私はずいぶん、がんばっていた。

結婚して川崎に移り住んだ。川崎の家を朝の5時に出て、青山までツーリング用の自転車を飛ばす。7時半から8時半までジムに通っていた。帰りも自転車である。会社が京王井の頭線の「永福町」に移ってから自転車通勤を続けた。つごう2年ぐらいは自転車で通っていた。

山登りも続けていた。荷物も軽い。走って登った。走って登っても息が切れない。いまの山岳マラソンのハシリみたいなものである。

毎月、月刊誌を出していくことがどれほど大変なものか、ふつうの人には想像できないだろう。私が作っていたのは英語学習誌である。ことばだけでも英語と日本語両方に知識がなくてはならない。間違いが許されない。雑誌にはカセットテープがついていた。雑誌の編集の合間をぬって、テープも作らなくてはならない。インタビューにもいなくてはならない。売れるための企画も考えなくてはならない。3号分を同時進行させる。その作業を、もっとも少ないときで3人でこなしていた。もちろんフリーランスの編集者なんかはいない。私は編集長で本の全責任は私に託されていた。

こちら、アタマはあんまりいいとはいえない。先のこと考えられない。目の前しか見えないのだ。「右を向いている」といわれれば右を、「左を向いている」といわれれば左を、いつまでも、体力の続く限り向いているクチである。

辞めていく人が多い中、4年間、なんとか生き残れたのは親からもらった頑丈な体と運動で鍛えた体力の賜物である。

いまでも、ときどき、若いころの生活を夢に見ることがある。ふつうは見ない。かぜをひいたり、体調を崩したときに夢にうなされる。見る夢は次の3つのうち、いずれかである。これらが繰り返し私の頭の中で繰り広げられる。

新聞配達をしている。新聞は4種類ぐらいを配っていた。どの家にどの新聞を入れるのかよくわからないままに新聞を配っている。さて、月末になり、集金にいこうとしたら、まるまる1ヶ月配っていなかった家があったことに気づく。もう取り返しが見つからない。

大学に通っている。卒業が近づいているのに、この4年間、いちども出席していない授業があることに気づく。教室がどこかも思い出せない。大学を卒業して二十数年たつのに、いまだにこの夢で苦しむ。

3つめの夢は出版社時代である。原稿の執筆依頼をすべき締切日がとっくに過ぎていてもかわらず、まだ依頼が済んでいない。その次の号は特集の企画がまだ決まっていない。カセットテープの編集も終わっていない。なにもできていないのに雑誌の発効日だけが近づいてくる。

夢から覚めるとシャツもふとんも汗ですっかり濡れている。

古い日記には、私がある新聞から取材を受けたときの切抜きが貼ってあった。

私の企画で「爆笑！日本人英語」という特集をやったときに取り上げられたものだ。カタカナ英語から始まって、日本人がそうとは気がつかずに平気で使っている「珍English」とでもいうべ

きものを拾い集めたのである。「Lady

80」（英語の意味は「80歳の女性」）なる、若い女性向けの化粧品名まで槍玉にあげてある。よく、化粧品会社から訴えられなかったものだ。冷や汗物である。おかげでこのときの雑誌はよく売れた。

切抜きには1986年4月28日とある。こんな時代もあったなんてすっかり忘れていた。がんばっていた若い頃の自分に出会えて、ひさびさに励まされた。

歳とったのかな

歳とったのかなあ。歳とったんだろうなあ。なんでそう思うかということ、自分より若い人からいろいろ「教えてもらう」からだ。「教えてもらう」といったって、なんにもこちらが「お願いします」って頼んでるわけじゃないよ。向こうからかってに教えてくれる。

だいたい、歳をとると、いまさらなにか新しいことを学ぼうという気にならない。興味がわかない。はやりの歌、おいしい店、流行のファッション、新しいゲーム、携帯電話の新機種、そんなものどうでもよろしい。英語でもいうじゃないですか。

The old dog learn no new tricks.(老いた犬に新しい芸は仕込めない)

「仕込めない」のは、つまりは「興味がない」んだよね。二本足で立って歩けば、ビーフジャーキーももらえるのはわかってるけど、そんなことアホらしくてやってられないんだと思うよ。

だいたい、新しいことというのは古いことの延長線上にあるものだ。

「世の中になべて新しきものなし」とかなんとか、誰か言ってたよね？誰だっけ？

パソコンや携帯ゲーム機を使って遊ぶ「ゲーム」だって、カルタやトランプ、将棋の延長線上にある。私なんかの世代であれば、地面に向かって5寸釘を投げ、突き刺して遊んだ経験があるろう。あれも「ゲーム」である。あっちのほうがよく興奮した。5寸釘なんてそうそう手に入らないからね。さんざん、興奮して遊んだから、いまさら、似たようなことようなことに興味がわかないだけである。

高校生のころ「歌声喫茶」に誘われたことがある。歌詞カードをもたされ、ギターやアコーディオンの伴走に合わせてみんなでいっしょに歌う。いまの「カラオケ」みたいなものである。みんなと一緒に歌うというのが快感なんだろうねえ。あいにく、当方、そういう感性は持ち合わせていない。カラオケマイクを握って「ワオ！ワオ！」やってるくらいなら、クワを持って畑で「エイ、コラ」やってるほうが性に合っとなる。

若いときというのはなんでも吸収する。知識欲が旺盛だ。獲得した知識、情報は人に教えたくなる。自慢したくなるわけだ。うちの娘がまさにそうです（高校1年生）。

「お父さん、なんにも知らないんだなあ」

という。父は笑うしかない。娘だからいわれて腹はたたない。

若い人というのは年とった人は新しいことはなんにも知らない、と思っているらしい。年寄りといってもいろいろいる。なぜか「歳を取っている」というだけで、それで束ねてしまう。知らないこともあるけれど「知らなくてもいいこと」もある。知らなくても「想像ができる」こともある。そこは経験の力だ。過去の学習の力である。

目を患って病院に入っていた。私の病室には私を含め、8人ぐらいいた。脳卒中の人、言語障害のある人、車椅子の人、いろんな人が運ばれてくる。皆私より、歳が上だ。看護師さんに、

「りんご丸さん、若手ですね！」

といわれた。

そのうちのひとりのかたと親しく口を聞くようになった。お互い、目を患っており、話題が共通していたからである。

「同病相哀れむとはこのことですかなあ」

とそのかたはいわれた。

75歳くらいだったと思う。Sさんということにしておきましょう。

私がパソコンを仕事にしていることを知り、私にインターネットのことを聞いてきた。

「インターネットをやりたいのだが、ネット詐欺などが怖い」

私はインターネット事情をていねいに説明してあげた。

つい調子にのって、デジタル信号のことも説明してあげた。

データはすべてデジタル信号化され、世界中を飛び交っている。1バイトは8ビットという単位で構成される。1000バイトで1キロバイト、1000キロバイトで1メガバイトになる。音声も画像も文字もすべて、これらの信号に細分化されて、高速回線を瞬時に移動している。すごいでしょう？

Sさんはちょっと怒ったようにいった。

「そんなことぐらいわかるよ」

そうなのだ。Sさんはかつて無線士であった。日本国籍や海外国籍の大型船に乗って世界中を回った。戦争末期（第二次世界大戦です）に無線士の教育を受けた。いまでは船舶の通信手段として廃止されてしまったけれど、「トンツウ」です。「モールス信号」と呼び変えてもわかかなければ、映画『タイタニック』を見ればわかる。「トンツウ」が無線で使われ始めた直後に「タイタニック号」が悲しくもその恩恵に浴することになった。有線のやつはアメリカの西部劇にひんぱんに出てくる。

文字をすべて長短の信号に置き換えて伝送波に乗せる。

「遭難しかけている船から発信された無線も受けたことがあるんですか」

「あるよ。なんどもある」

私は「トンツウ」がデジタル信号そのものであることに改めて気づいた。インターネットが有線を使ったデジタル通信網なら、「トンツウ」は無線を使ったデジタル通信である。画像と音声を送れないだけである。どちらも電気信号を使っている点では基本的なことはそれほど違ってない。私とその基本を教えようとしたからSさんはカチンときた。「なにもいまさらあんたからそんなことを教わらなくて」ということである。

Sさんは顔だけ見たら、どこにでもいそうなふつうの「おじいちゃん」である。実際、看護師たちはそう思って話しかけている。彼に対する人間的な興味がないからである。「モールス信号」を聞いたことがないからである。「メール」と違い「モールス信号」は届く先から瞬時に消えていく。その信号音から船が沈みかけているかどうかを聞きわかる。近くにいる船に救助を要請する「トンツウ」を送る。英語のニュースを聞き取るよりむずかしいよ。尊敬に値する。もっと現役時代の話を聞きたかったけれど、その前に退院された。

「僕たちみたいに、情報産業の世界にいる人間にはインターネットは不可欠なんですよ」

若い人からいわれたことがある。

これでも若い頃は業界紙の記者をしていた。フリーランスのライターをしながら大学を卒業した。出版社には4年近くいた。インターネットが始まる前から、KDDの国際衛星電話回線を使い、APのニュースを読んでいた。米軍放送のニュースよりもこちらのほうが早い。

「なにをいまさらあなたから」

である。

知らないというのはおそろしいものである、とよくいわれる。知らないからいえる。知っていたら恐ろしくていえないよ。

幼稚園の先生とことばのことでちょっと議論になった。なんだったか忘れてしまったけれど、たとえば

「あげる」とでもしておきましょう。なんでも同じだから。

「あげる」はほんらい謙譲語だ。目上の人になにかを「与える」場合に使う。でもいまでは「赤ちゃんにお乳をあげる」、「ねこにごはんをあげる」と使う。

「みなでお花に水をあげようねえ〜」

なんて使う。花に「お」はいらない。水は「やる」でいい。

「車でおいでになられるかたは・・・」

なんていうのもよく見る。なんか変だと思わないのは書物を読まないからである。年長者と話す機会がないからである。

「車でこられるかたは・・・」でいいじゃない。バカていねいなのは相手に失礼である。もっともいわれた相手も気づかないからそれはそれでいいのかもしれないが。

「でも」と先生はいう。ほかの先生も同じ事をいう。そりゃあ、そうだ。みんな知らないのだから。立つ瀬がない、とはこのことである。「そんなこともいわない」といわれそうだ。

年長者のことば遣いにはケチをつけるのに「3才児」なんて平気で書く。「頂きます」、「沢山」も書いて平気だ。

「だって、ほかの幼稚園でもそう書いていますよ」

アホである。

高島センセイの受け売りだが、日本語の中の漢字なんてのは90%近くはあて字です。新聞記者が使う『用事・用語ハンドブック』では、一応、会社や仕事を「やめる」ときは「辞める」、同じ「やめる」でも動作を中止する場合は「止める」となっている。そんなこと、誰かがかかってに決めたと過ぎない。便宜的なものである。もっともらしい漢字をあててあるだけだ。ちょっと前の本、たとえば漱石センセイなんかはぜんぶ「已める」（やめる）です。

「こんなくだらない仕事はヤメだ、ヤメ。ネクタイもヤメ、ついでに会社もヤメてやる！」

なんて叫んでいるときに、「辞め」か「止め」あるいは「已め」なのかなんてのは考えてやしない。文字に表すときだけが問題となるのだ（これも高島センセイの受け売りです）。

『百人一首』を引き合いに出すまでもなく、古来、いろいろな漢字が音にあてはめられてきた。

「端書」（はがき）、「歳が改まる」（としが改まる）「六づかしい」（むずかしい）、「丸で」（まるで）。ぜんぶ、漱石センセイのあて字である。

こんなことをいうと、

「でも、教科書では」とか、。「でも辞書にはこう書いてある」、「テレビのアナウンサーが」とか、いいだす人がいる。

これもアホである。阿川センセイが怒るわけである（娘のほうじゃありませんよ。兄のほうでもない）。高島センセイが怒るわけである。

年長者になにか意見を述べる場合はよくよ考えたうえで口にするがよろしい。末席ながら、一同になり代わって述べておきたい。

仙人の研究

仙人を研究している人に出会ったことがある。仕事に食い詰めて駐車場の警備員をしていたときである。相手も同じ警備員であった。まあ、警備員をしている人はそれぞれいろいろな事情を抱えている人が多いですから、そういう人がいたって不思議ではない。30歳前後のいたってふつうの人でした。

仙人で思い浮かべるのは、中国の山奥に住んでいて、たしか霞を食って生きているってことだ。霞ってなんだろうな、と調べたことがある。自給自足なんていうもんじゃない。それを超越しとる。そこが仙人なんだろうねえ。たしか移動手段は雲に乗るんじゃないだろうか。

仙人を研究している人はけっこういるらしい。指導者がいる。研究会というのか、そういったのをアパートの一室で定期的に行っている。

「仙人ていうと、やはり、あれですか、食べ物を食べずに生きるというか・・・」

(続きは「有料版」で・・・)

いいよ

私が歳をとったのかそれとも世の中が変わったせいなのか、以前は、感じなかったというか気がつかなかったことが、最近はいろいろ感じたり、気がつくようになった。

きのうの午前中のことである。近くの店でお土産用にドーナッツを買おうと思って並んだ。私の前にすでにひとり並んでいた。にもかかわらず、その人の横に子どもを連れた女性が並んだ。なんとなく嫌な予感を感じた。でも、こっちが先に来て並んでいるんだしなあ。

私の前の人買い終わり、店員がいった。

「次の人、どうぞ」

私がなにかいう前に、子ども連れの女性がドーナッツを注文した。

えーっ!?

「すみません、こっちが先に……」

私だって急いでいる。ほんとはいけないんだけど、郵便局に車をとめてドーナッツ買いにきたのだ。

店員が私の顔を見ていった。

「はい、どうぞ」

と、その女性が横からいったのである。

「いいよ」

いいよ、って、どういうこと? 「そっちが先に買ってもいいよ」ってことかしら? 「ゆずってあげるよ」っていうことかしら?

「いいよ、っていうことはないだろう」ということばが瞬時にして運動言語野内部で組み立てられ、私の口まで送られた。でも、いまここでそれをいわなくてもいいだろう、というもうひとりの自分がいて、そのことばは口から飛び出す一歩手前でそのまま飲み込まれた。

もうちょっと前というか、私がまだ20代、30代のころなら、こんなことをいう人はいなかったように思う。並んでいることに気がつかなくて、

「あ、すみません（気がつかなくて）」

とでもいうのではないだろうか。

なにもこの女性が特別なのではない。

当方、幼稚園で仕事しております。先生たちから頼まれた、事務的な仕事をこなしています。まあ、ほとんどはパソコンを使った仕事です。先生たちの手に負えない仕事を私が代わりに行う。けっこうめんどろで専門知識を要する仕事も多い。その場では終わらず家に持ち帰り、1週間ぐらいかけて仕上げる仕事もある。きちんと「ありがとうございました」という先生もいれば、なにも言わない先生もいる。「あ、はい」で終わりである。けっこう大変だったんだよ。

「私も若いころはそうだったんだろなあ」

と思うようにして、自分を納得させている。

これが若い先生ばかりかということ必ずしもそうとはいえない。

当方、自分で書いた本のユーザーサポートもしておる。質問がファックスやメールで入る。これにできるだけわかりやすく、ていねいに回答を書いて送り返す。その前にいちど電話で直接話

すこともある。質問内容があいまいで要領を得ないからだ。質問者が若い先生だけではないことがわかる。園長とおぼしきかたもおられる。電話での回答なら、まあ、だいたいお礼をいわれる。ファックスやメールで回答した場合、これまで「お礼のことば」が帰ってきたのはたった1件である。私が教育を信じない、と公言してはばからない理由はこういうところにもある。

ことば遣いの問題は年齢とはあまり関係ないような気がする。口から出ることばというのはその人の心の中の鑑だからである。どういうふう生きてきたか、どういう躰、指導を受けてきたかの結果だからである。ふだんの生き方、考えかたがそのまま口から出てくる。ふだんの生きかた以上のものは口からは出てこない。

なぜ、こんなことをいうかといえば、同じきのうの夕方、こんなことがあった。

自分の家の前で車をぶつけられた。右にウインカーを出して発車しようとハンドルを切った瞬間に後ろからきた車が私の車の右横にぶつかった。私の車はへこみ、相手の車は塗料がはげた。車が真横にいたらいくらなんでも気がつく。もしそうだったら、相手の車がへこみ、私の車は塗料がはげていただろう。

相手の車は私の車を追い越してから止まった。その車は車体に「介護サービス」のシールが貼ってある。移動が不自由な人を施設などに運ぶ車である。私の町内に住む「患者」を乗せ、家に送る途中だった。

「急いでいる。先に患者を送り届けてくる」

といって走り去った。5分ほどして戻ってくるなり、車の窓を開け、事故現場で待っていた私に向かっていった。

「あとで請求書を送るから」

どうのことですか？

私がウインカーを出しているかどうかはわからなかったという。相手の車は運転手を含め、3人乗っていた。上り坂である。制限速度の時速30キロで走っていれば、ブレーキを踏んだ瞬間、もっと早く止まっていた。止まりきれないほどスピードを出していたから私を追い越して止まったのである。相手は制限時速内で走っていたという。道路交通法では停車している車を追い越すときは1メートルの間を空けて追い越すのではなかったか？道にはそれぐらいの余裕があった。相手は続けていう。

「そんなにごちゃごちゃいうんだったら、警察呼びましょう。それがいちばんだ」

その前に別の用事があって病院に行かなければならない。警察を呼び、現場検証をしてもらうのはその後だ、という。要するに、なにもかにも急いでいて制限速度を超えて飛ばしていた。前だけ見ていた。それでウインカーに気づかなかったのだ。私にも落ち度がなかったわけでない。右にウインカーを出したあと、再度確認すべきだった。

60代と思われる当事者は同じぐらいの年齢の上司を乗せ、1時間半ほどして戻ってきた。

警察沙汰にたくない。理由は、患者がすぐ近くに住んでいて、定期的に同じ道を通るからだ。そんなことは私には関係ない。そもそも、請求書を送る、とか警察を呼ぼう、といっていたのは相手である。

「だいたい、病人に近いような人を運ぶ車が事故を誘発するような運転をしていること事態

が問題である。ふつうの車以上に慎重に運転していれば、ウインカーにも気づくし、ぶつかってもすぐに止まれるはずででしょう？」

結局私はすべて「なかったこと」にした。お互いを責め合ってもしょうがない。それにこれから続くであろう、時間的なものや精神的苦痛を考慮に入れたら、車の被害は小さい。幸い、けが人もいない。相手は私より年齢が上である。しきりに頭を下げている。お互い許しあい、同じことが起きないようにそれぞれ反省すればよい。

それにしても、と思うのである。

その人の人間性というのは、出るべきときに隠しようがなくことばに出るものだ。

私が小学校4年生のとき、村にテレビは3台しかなかった（たぶん）。

1台は村役場にあった。夕方、大相撲が始まる時間になると、村の人--ほとんどは男の人だったと記憶する--は村役場に集まった。畑仕事なんかほったらかしである。

テレビを置いてある部屋はトイレにも行けないぐらいの人であふれていた。部屋に入りきれない人は、部屋の窓枠に腰掛けて相撲を見ていた。私はその人たちのお尻の間からのぞいていた。5、60人はいただろうか。野次や応援で、テレビの音なんかまったく聞こえない。もちろん、白黒テレビである。

あとの2台はいずれも村内の裕福な家にあった。

テレビ放送は1953年ごろにはすでに開始されていた。残念ながら、その電波は東北の山奥までは届いていなかった。山の上に中継用のアンテナ（テレビ塔と呼んでいた）が立ち、ようやく私の村でもテレビが見られるようになったのである。

テレビ塔ができたというので、その塔を目指して全校生徒で遠足に出た。野を越え、人の畑を越え、川を渡る。小休止。水筒の水を飲んだ。おやつも食べた。たんぼのあぜ道を進んだ。蛙が鳴き、たんぼのあぜにマムシが三角の頭をもたげている。急な斜面に息を切らせる。上りきったところに無人の電波塔が立っていた。いまでいう送電線の塔みたいなものである。高さもそんなものである。

遠くにうっすらと八甲田山が見えた。その手前にも山がある。先生が説明する方向に目を凝らすとなにやら金属板めいたものが光って見える。

「東京から送られてきた電波がいちどあそこで反射され、ここまで飛んでくる」

ほんとうかどうか、先生がそんなことを説明してくれた。

草はらでおりぎりを食べ、少し遊んだ。

帰りはいったいどうしたのだろう。同じ道を通ったとは思えない。時間がかかりすぎる。山の反対側に下りて国道を歩いて帰ってきたのかもしれない。

テレビを購入したことが知れると、NHKが受信料を徴収にくる。テレビそのものが高価なうえに受信料までとられてはかなわない。徴収員がくると、テレビを押入れに隠す、という、子どもじみたことまで本気で行われた。

テレビは居間に置いてある。学校が終わる。わざとテレビがある家の子とその家の庭で遊んだ。テレビがつくのを待つのである。いったん、テレビがつけられると遊びなんかそっちのけである。そもそもテレビがつくのを待っていただけだもの。外から、居間の窓にぶら下がる。鉄棒の懸垂状態である。いちどにせいぜい3人しかぶら下がることができない。腕の力の限界までそうやってぶら下がった。私はいまでも懸垂には相当自信があるけれど、これはそのときのなごりであろう。

人の家のプライバシーなんてあったもんじゃない。居間のテーブルに夕飯が並んでも帰ろうとしない。ついに中から障子を閉められて終わりである。

もう1台は上級生で親分格の級友の家にあった。2階建ての大きな家で、周囲には広い畑が広がっている。その家には怖いことで知られるおじいさんがいた。そのおじいさんの許可がない

ことにはテレビは見せてもらえない。親分がその級友に話をつけてくれた。夜、夕飯が済んだあと、上級生ふたりと下級生2人で落ち合う。

上がり口で、おじいさんから言われた。

- 1.テレビを見ている間はきちんと正座をし、ひざの上に手を乗せて置く。
- 2.テレビを見ている間は声を立てない。
- 3.テレビを見終わったら、ありがとうございます、という。
- 4.テレビを見終わったら、すぐに帰る。

「わかったら家に上がってもよろしい」

私たちはとにかくテレビが見たかった。

見たのは、たぶん、『ローン・レンジャー』じゃなかったかと思う。『ローハイド』という西部劇も人気があったのでそっちと混乱しているかもしれない。番組の冒頭、ナレーターが太い、低音で"The

Lone Ranger うんだらかんだら"と叫ぶ。あの始まりにわくわくした。Lone Ranger

とは、つまりは一匹狼の「保安官」である。悪を懲らしめ正義を正す。黒のアイマスクで顔を隠し、愛馬シルバー（白馬）にまたがりさっそうと現れてはさっそうと消える。テレビそのものが白黒だったから、この白黒感はわかりやすい。「ハイヨー、シルバー！」というのが去り際の掛け声である。なにかというと、遊びのときに、この「ハイヨー、シルバー！」の掛け声を使わせてもらった。みんなで駆け出すときに、「ハイヨー、シルバー！」である。勧善懲悪スタイルの、一話完結ストーリーが良かった。相棒のトント（インディアン）がいうきめセリフ、「白人うそつき、インディアンうそつかない」もよく使ったなあ。

見ている間、とにかく足が痛かった。ふだん、正座なんてすることはない。それを1時間近くも正座をさせられた。右の足の上に左の足を乗せる。耐えられなくなり、左の足の上に右足を乗せる。足をお尻のそとにずらす。どうやっても耐え難い苦痛である。

テレビの左側におじいさんとおばあさんが座る。右側には当家の両親と子どもふたりが座っている。番組が終わり、私たちはテレビを見せてもらったお礼をいった。

親分の級友が電車のおもちゃを見せてくれるといった。正直、そんなもの、どうでもよかった。

おじいさんが異議を唱えた。父親が、

「まあ、ちょっとだけいいじゃないか」

といった。

別室に移動した。部屋いっぱい、レールがひいてある。スイッチが入れられ、おもちゃの電車がループ状になったレールの上をとことこ動き出した。電池ではない。壁のコンセントから電源を取ってある。村でそんなおもちゃを持っている子どもはいない。

われわれはふだんの遊びでも、木を削って刀を作ったり、板切れを盗んできてはゴム鉄砲を作っていたのである。

「もう遅いから」

父親にうながされ、私たちは家を出た。

私も含めて、私の左右、背後でほぼ同時に「は一」というような音が聞こえた。暗い夜道を歩きながら、みんな、急におしゃべりになった。

「おじいさん、テレビを見ないでおれたちのほうばかり、見てたよな」
もちろん、津軽弁である。

親分たちはその後も何回か行ったらしい。

「夜、ひとの家にテレビを見に行くのは迷惑がかかる」

母から注意されて私は行かなかった。

村ではほかの家でもテレビを買いだした。

叔父の家でもテレビを買った。私はプロレスがある日は叔父の家に見に行った。目当ては力道山である。プロレスが始まる時間になると男湯にはひとりも客がいなくなった。

「あっ、力道山の額が切れました。力道山の顔は流れ出した血でまっかです！」

アナウンサーが叫ぶ。

試合が始まる前、リングサイドでアメリカ人レスラー、ブラッシーがヤスリでもって、自分の歯を削って見せる（デストロイヤーだったかもしれない）。その歯で力道山の額に噛みつく。歯科学的に見たらまったくむちゃくちゃな話である。当時はおそらく、誰もそうは思わなかった。私もまねをして自分の歯にヤスリを当ててみたことがある。とてもじゃないけど、できない。

「ブラッシーはすごいなあー」

と思った。単純である。

白黒なのに、血が赤く見えた。興奮したどこかの家のおばあさんが倒れる。プロレスのある日はかならずとっていいぐらい、外で救急車が走る音が聞こえた。翌日、学校では決まってプロレスごっこが行われた。

昼間、両親は働きに出て家にいない。放課後は叔父の家で過ごすことが多かった。親から禁止されたこともあり、中学に進んだ親分たちとはその後、遊ばなくなっていた。日曜日にも叔父の家でテレビを見ながらぼんやりと過ごした。親分と同じ学年の、女のいとこがときどきチャンネルを変える。叔父の家のテレビとはいえ、さすがに私は好き勝手にチャンネルを変えることはできない。いちどでいいから好き勝手にチャンネルを変えてみたいものだと思っていた。

私は親にテレビをねだった。ついに我が家にもテレビがきた。私が小学校6年生のときである。好きなときに好きな番組を見られる。

真空管式である。スイッチを入れて少したってからモワァッと画像が出る。

『3バカ大将』、『名犬ラッシー』、『アニーよ銃を取れ!』などアメリカ直輸入の番組を見た。「アニー」が「兄」に聞こえた。「兄よ銃を取れ!」とっているのに、なんで女性が馬にまたがりライフルを撃っているんだろう?と不思議だった。コリ一種の犬をすべて「ラッシー」だと思っていた。日本の番組では『月光仮面』、『少年ジェット』、『とんま天狗』、『怪傑ハリマオ』などである。月光仮面をまねて、風呂敷を首に巻いた。マント代わりである。『透明人間』や『鉄人28号』は白黒だったせいでより恐怖感があった（このへん、放送時期がちょっと混乱しているかもしれません）。

テレビのおかげで毎日の生活が楽しくなった。テレビを通じて東京の文化が地方の山奥の村にも入ってくるようになった。自分たちの住む村以外の地域にも目がいくようになった。

あれはまだ雪が降る前であった。

私はひとりで小学校の非常階段に座り、ぼんやりとしていた。小学校は私たちの卒業をまって取り壊されることが決まっていた。いろんな思い出があった。その学校がなくなってしまう。子ども心にも何とか残す方法はないものだろうかと考えた。私の祖父が通ったというぐらいで、築100年はたっていた。屋根に積もった雪の重みに耐えられるように、太い柱と梁が使われていた。明治の建物っていう感じがした。

親分が校庭を横切ってこっちにやってくるのが見えた。

久しぶりに会う親分は泣いていた。

「お前にこれを全部やるよ」

お菓子の紙箱にメンコがたくさん入っていた。メンコというのは紙でできた丸いカードみたいなものだ。スターやマンガのキャラクターの絵がかいてある。地面にたたきつけ、生じた風で相手のメンコをひっくり返す。ひっくり返れば自分のものになる。大きいほど有利である。紙箱には大きな、武者絵の描かれたメンコがたくさん入っていた。

なぜ親分が泣いているのか、なぜ突然、私に大量のメンコをくれるのかわけがわからない。親分はなんにもいわず泣いたまま帰っていった。

その夜だったか、次の日だったか、私は両親から、親分があのテレビを見せてくれた家の子の頭を缶詰めの空缶でメッタ打ちにした、という話を聞いた。

力道山ほどの血が流れた。

「5針も縫ったそうだ」

母がいった。

私たちに電車のおもちゃを見せてくれた人は中学を卒業して高校に進んだ。親分は中学を卒業し、集団就職で東京に出た、と聞いた。

何十年ぶりかで、その中学の同窓会が東京で開かれた。その同窓会に出たいところから手紙がきた。親分は東京でタクシーの運転手をしているという。まだ独身で、頭はすっかりはげ上がっているとのこと。いところが私のことを話すと、

「あいつはオレの子分だった」

と、なつかしそうに語ったそうである。

私はあのときもらったメンコをすべてなくしてしまった。

故障中

以前から思っていたのだが、「故障中」の貼り紙に「中」はいるのだろうか。いらないんじゃないだろうか。清涼飲料水の自動販売機や公衆電話、切符の自動販売機などなど、いたるところに「故障中」って札が貼ってある。まるでそれが正しい日本語の使いかたの見本みたいである。ずーっと前はたんに「故障」だったようにも思う。いつごろからなんだろうか、「故障」が「故障中」の貼り紙に変わったのは？

「故障」というのは現在の状態を示すことばである。「故障」のなかにすでに「故障（中）」のように「中」が含まれている。「故障」はすなわち「壊れている、正しく動作していない状態」のことである。「故障」と貼り紙があれば、それは「故障しています」ということである。

これは「販売中」や「勉強中」とは異なる。「販売」は単に名詞である。販売しているかどうかには言及がない。「勉強」も同じ。

「昼食中」、「工作中」、「出張中」、「運転中」、「留守中」、「連載中」、「歩行者横断中」などもわかる。「留守」でも意味は通じるがなんとなく、「いま家には誰もいませんから、空き巣に入ってください」といっているような感じがしなくもない。「会議中」も含めて、主語はみんな「人」である。

「～中」は人や機械が「なにかをしています」ということだ。自動販売機に札を貼って、「販売中」はありえる。監視カメラや、ある種のセンサーが「稼働中」というのもありえる。ではそれらの機械が、本来動いているべきときに動かなくなった、異常事態に陥ったときは「故障」なのだろうか「故障中」なのだろうか、というのが私の疑問なのである。

「運行中」、「料理中」、「禁煙中」などは、現在ある動作が続いており、それはいつか停止するかもしれないことを暗示している。一時的な状態を示している。「故障」というのはなにか動作が続いているんじゃないなくて、もともと動いていないものが、正常に動かなくなった状態のことである。永遠に直らず、廃棄処分となるかもしれない。動いていた状態から動かなくなった。その原因はなんらかのトラブルである。

こう考えてくると、「故障中」以外の「～中」は、なんだか動作が「前に」向かっている。動作が進行している。英語でいえば、... is working ということである。「故障」は「停止 (stop)」しているということである。「進行している」と「進行していない」ことのどちらにも「中」が使われるから違和感があるのだろう。

「故障」でことばが足りないと感じるなら、「故障しています」と書けばいいんですよ。それを「故障中」なんて、まるで「休憩中」と同じ使い方をするから、変に聞こえるんです。

そう思うのは私だけなんだろうか？

映画『無能の人』を見た。題名をみただけでピンとくる人は相当な「つげ義春」ツウです。どうせたいしたことないと思ってました。やっぱりそうでした。でも得るものもありました。

つげ義春の世界を改めて映像で見せる意味はどこにあるんだろうね。つげ義春のマンガそのものがすでに芸術になっている。それを動画でなぞる意味などない。絵画と違い、マンガっていうやつはストーリーがあるから映画にしたがるのかね。これが岡本太郎の絵ならそうかんたんに映画にはならないよ。

映画『無能の人』は動かないコマを単に動かしているだけだもの。監督兼主演の竹中直人氏などコッケイでしかない。コッケイなことをやりたかったんでしょけど、『無能の人』に描かれているのはコッケイな世界ではない。私にはうまくいえないので代わりに、吉本隆明氏に語ってもらいます。いや、単にマンガ本『無能の人・日の戯れ』（新潮文庫）の解説からの引用です。

「（つげ義春のマンガの特徴は）見させるよりも読ませるマンガ。（地の文を）つなぎ合わせる」と一篇の掌篇の（私）小説になっているとっていい過ぎではない」

全文引用したいところだが止めておく。私なりの解釈でいう。ふつうのマンガってというのは絵とセリフにわかれている、セリフをぜんぶ白くぬりつぶしてもおおよそのストーリーが楽しめる。ちょうどテレビドラマを、音声を消して見てもストーリーがわかるようにね。でも、つげ義春のマンガは「消音」したらなんのこっちゃわからない、とってあるんだね。それだけ、絵と吹き出しがのっぴきならない関係にある。つげ義春氏は井伏鱒二の影響受けてるらしいからねえ。「マンガで小説を書いた」みたいないいかたは外れてないんじゃないだろうか。

映画ではやたらと放屁や放尿のシーンが出てくる。品がない。つげ義春氏のまんがはどれもエロティックなシーンが多く、それが氏のマンガの魅力となっている。エロティックでポルノ的ではあけれど品がある。マンガでありながら実写よりもエロティックだよ。リアリティーがある。映画は実写なのに、マンガよりもリアリティーに欠けるってどういうことだろうね。

マンガ『無能の人・日の戯れ』には石を売る人が出てくる。映画ではこの石屋がストーリーの中心にすえられている。マンガ家業で食い詰めた主人公が、多摩川の河川敷で拾った石を、店に見立てた掘っ立て小屋の軒先で売るのである。もちろん売れるわけがない。ふつうの石だもの。売っている人間には思い入れがある。買うほうにはそんな思い入れなどどうでもよい。無価値である。映画で、店を冷やかしてきた客のひとりがいう。

「君、無価値のものに金は払えないよ」

この「石屋」、なんか事業形態として執筆業者と似ている。マンガ家も文筆家も、ともに、売れるか売れないかわからない作品をせっせと書いている。仮にそれを出版社が引き受け、世に出たところで、これまたどの程度買い手がつくのかは出版してみないとわからない。そういう意味では映画産業も同じである。結果的につげ義春氏は己の生業を石屋に託して語っているようにも見える。

あまりうまくいえないのでこのへんで止めておきます。

主人公の妻役を演じた吹雪ジュンには感心した。いままで知りませんでした。なにせ、こちら、アメリカかぶれでして、日本の映画、テレビドラマはいっさい見ない。1952年生まれとは

思えない若さですね。竹中氏よりも年が上なのに、妻としてちゃんと年齢のバランスがとれている。そう演じているんでしょうけど、うまいなあ。セリフにリアリティーがあります。それに比べてほかの役者はみんな棒読みです。竹中直人氏のセリフなんかひどい。よくこれでOK出せるね。自分が監督だからでしょうね。「モビット」のセリフのほうがよほどうまくいってる。

全体的に言えば、学生映画に毛が生えた感じ、といったらいい過ぎでしょうか。

竹中氏にはCMでもっと稼いでもらって、次回はぜひ、『必殺するめ固め』あたりにでも挑戦してもらいたいものです。

*

ふだん、映画に関してはなにもいう気はないのだが、ことがつげ義春の作品だから、ちょっと黙っていただけませんでした。

お元気ですかあ？

健康上のことが日々の話題に上るようになると、それは年を取った証拠なんだそうです。そうだよねえ。若い人が、細かい文字が読めない、とか、神経痛が、なんて話をしないものねえ。

私自身、目が近くなった。もともと強度の近視なんだけれど、英語の辞書なんかめがねをはずさないと見えない。耳も遠くなった。これは自覚症状がない。娘がテレビを見るときと私がテレビを見るときとのボリュームの大きさの違いで、耳が遠くなった、と判明した。そういえば、若い頃から声が大きかった。声が大きい人は耳が遠いせいもあるんだってね。ベートーベンが声が大きかったらしいよ。

口が悪くなった。もともと悪いのがさらに悪くなった。背が縮んだ。これで腰が低くなればまだ救われるんだろうけど、これだけは若い頃から変わらない。

「実るほど垂れる稲穂の頭（こうべ）かな」ということわざがあるらしいね。40代のころ、ある人からやんわりとそういう指摘を受けたことがあります。自慢にもなんにもならないね。

健康にかかわるぐちは聞いていて心地よいもんじゃあないですね。お互いでいい合っているぶんにはまだいい。はたで聞いて心地よくない。年寄りくさいんだね。

「年をとった」、「金がない」、「時間がない」、以上を、私は「3大いい訳」とよんでおります。だって、そうでしょ？ いったって、しょうがないことばかりです。

これが江戸時代なら、あたしら、とっくに死んでますよ。もう50代後半ですもの。

もう何十年も故郷の学友たちと会ってないけど、まだみんな生きているんだろうか。なかにはもう亡くなられた人もいるんでしょうね。生きていたとしても、ほとんどの人はもう昔みたいな勢いはないんじゃないかしら。

駆けっこでいつも1番を取っていたタツオ君なんかどうしてるかなあ。私は走るのが遅くていつもビリのほうだったけど、いまなら、彼を抜かせるかもね。

ええ、これでも私はけっこう体力づくりをしているほうだと思います。週に、2、30キロは歩いています。定期的にジムにも通っている。いまだにテトラポットの上を飛び跳ねて釣りしています。そのうち、落ちると思うけど。

年寄りくさい、って思われるが嫌なんだよね。幼稚園で仕事してるでしょう。先生たちはみんな私の娘といってもいいぐらいの年です。園児は孫です。年取るのはしょうがないけど、感性ぐらいいはせめて、彼女たちと同じように若くありたい。いや、感性に関してはライバルは園児ですね。彼らの感性はすごい。砂場で見つけた小さな貝殻にみんなで、わーわーいっています。

「このカイねえ、すごいんだよー」

オーオー、たしかにすごいねえ。

背中を丸めて歩いている人、風体がだらしない人、清潔感のない人、こういうのは私の分類ではみんな年寄りくさい人ですね。

思うんだけど、人間だけじゃないかねえ、こんなふうに、若い人と年寄りが見た目ではっきりと区別がつくのは。動物なんか、産まれたては別にして、青年も老年も区別つかないもんね。青年のライオンなのか老年のライオンなのかパット見てわからないでしょ。人が長生きしすぎてるんだろうねえ。生物学上、それはそれでちゃんとした理由があるんだろうけど、加えて医学の進

歩という加担もあるよね。本来助かるはずのない命が助かる。いや、助かっていいんですよ。私だって自分自身や娘がその瀬戸際に立たされたら、助かりたい、助けてあげたいと思うもの。

ライオンは自分でエサがとれなくなったらもう終わりでしょう。年金がもらえるわけじゃない。子にめんどうをみてもらえるわけじゃない。自分で自分のめんどうが見られなくなったら、それで終わり。実に過酷です。

私の叔父や叔母、祖父母を振り返ってみても、あるいは同年代の年取った人たちを見ても、あまり「年寄りくさい」と感じたことがないのはなぜなんだろうか。みんな百姓だったけれど、ゼンマイが切れるギリギリまで働いて、働けなくなっても、あまり他人をわずらわせることなく、亡くなっていった。

たまに病院へ行くと、年寄りばかりいる。私が若いころはこんなことなかったなあ。60歳、70歳になって、することがない、っていう人多すぎるよね。「老人生きがいの家」なんかで、朝から晩まで将棋や囲碁をやっている。ばあさん連中は1日テレビを見ている。同じ年代の人でも、園芸や農業を趣味にしている人は生き生きしてますねえ。年寄りくさくない。数年前に野比海岸でヨットやっている人と話したことがあります。カッコ良かったなあ。70代ですよ。腹筋が割れていた。あの人と会って、そうだ、オレもヨットやろう、って思った。単純だねえ。

年齢に関係なく、また、社会的地位や財に関係なく、何かに打ち込んでいる人ってというのは、話題が豊富なんだよね。話すことがいくらでもある。常に技術とか知識の向上が求められる。年取っているヒマがないんだろうねえ。病気をしたら、遊べるものも遊べなくなる。ふだんからそういうことに気をつけるようになるしね。

なんとなく、老人くさい人とそうでない人の分かれ目がこのへんにありそうですねえ。

名の由来

最初の子が産まれたとき、元の会社の上司に名づけを相談した。元上司は考え込む間も見せず

、「君は青森なんだから、子どもの名前は"りんご丸"がいいよ」

そうおっしゃった。それはいい名前だ。一度で覚えてもらえる。響きがいい。息子だって、名の由来を聞かれたら、

「父がりんごの産地出身なもので・・・」

そう答えられる。息子は故郷の宣伝を背負っているようなものだ。

家に帰り、さっそく、妻に伝える。

「Oさんがいい名前をつけてくれたよ」

その日は名前申請締切日の前々日ぐらいだったと思う。早く決めなくてはというあせりもあった。

「どういう名前？」

世の親と同様、「子どもの名づけの本」を2冊買ってきては調べてみた。どれもピンとこない

。「りんご丸だよ」

妻の第一声は、

「ばっかじゃないの！言うほうも言うほうだけど、それをまともに受け取るほうもどうかしてると思うわ」

もともと、このふたりは水と油みたいなもので、まったく意見がかみ合わない。夫のほうは、とにかく世間からずれたほうへずれたほうへと移動する生き方を好む。壊れた橋をあえて渡ろうとするタイプである。妻のほうは石橋を叩いて渡る。渡らない場合だってある。

「いい名前じゃない」

「どこがいいのよ？あなたっていう人はほんとうにばかね。子どもに一生負い目を負わせるつもり？あなたが、りんご丸に改名したら、子どもにもそうつけてもいいわよ」

ちょうど、我が家に滞在していた妻方の祖母は、ふたりの会話をそばで聞いて大笑いしていた

。「ほら、おばあちゃんだって笑ってるじゃないの」

結局、息子は「将司」という、ごくふつうの名前に落ち着く。当時、人気のあったプロゴルファーの尾崎将司といっしょだからいい、というのが妻の意見である。

2番目が産まれた。また上司に報告かたがた相談する。

「こんどは2番目だから、次郎丸がいいよ」

次男だから次郎丸かあ、これはいい。

妻は、

「あなたってほんとうにばかね。次郎丸っていうのは『安寿と厨子王』に出てくる盗賊の名前よ。よくも自分の子どもにそんな名前がつけられるわね。子どもを盗人にでもさせる気？」

『安寿と厨子王』なんてずいぶん久しぶりに聞く名前だ。それに出てくる盗賊の名前が次郎丸

だなんてよく覚えているものである。ちょっと、感心した。よもや、O氏だって知らなかったに違いない。知ってたら、そんな名前をくれるわけないもんね。

でも、「次郎丸」はいさましくていい。なんだか、背中にいつも刀を背負っていそうじゃない。「りんご丸」に劣らず、一発で名前を覚えてもらえる。営業先で名刺を出したときに、まず名前がきっかけで話がはずむ。

このころ、私はアメリカへ出かけなければならない用があった。国際電話ごしに子どもの名づけのことで議論が続いた。

「とにかく、次郎丸にしろ！」

の一点張りで受話器を置いた。

帰ってきたら子どもの名前は変わっていた。

3番目は女の子である。名前については一切相談もされなかった。

このたび、ブログのニックネームを決めるにあたり、妻のいう、「あなたが先に改名したら」を思い出して「りんご丸」としたしだいである。

どういう生まれによるものか、私は「師」と呼べる人がもてない。いないのじゃなくて、もてないのだ。

人は生きている限り、なんからの「師」に当たる人はいて当然だ。たとえば、人生のごく初期の段階で出会う、小学校の「恩師」である。私はこれもだめである。先生が、教壇の上からもっともらしくいう言葉に、

「そうかなあ」

と反応してしまう。先生にしてみたら、実に扱いにくい、かわいげのない子どもだったろうと思うよ。踊りやピアノなど習い事はしたことがない。だから、その手の師匠をもつ機会もまたなかった。

父親は一切、教訓めいたこと、しつけめいたことをしない人であった。だから救われた。でなければ、父親への反発のすえ、グレるか、家出していただろう。

高校のときの担任はこういった。

「お前たちなあ、いったん就職したらそこを辞めるんじゃないぞ。辞めてもういちど就職したら、初任給は低いところからやり直すことになる」

転職は不利だといっているわけだ。

高校生にもなると、多少知恵がついている。

「そうかなあ。そうともいえるし、そうともいえないよね」

まあ、こんなだから、会いたいと思う恩師はひとりもない。年賀状すら書いたこともない。同窓会のお誘いがきても、勝手にやってくれ、である。

師がない、ということは教えてくれる人がいない、ということでもある。自分の師は自分である。早い話、独学でやるしかない。人にすり寄ってまで教えを乞うぐらいなら、いいよ、自分で勉強するから、テなもんである。おかげで、しなくてもいい苦勞をする。

「師」はいないけれど、「師匠」と呼んでいる人はいる。釣りの師匠である。釣りといってもふつうの釣りじゃあないよ。溪流釣りである。テンカラ釣りというやつ。エサはつけない。エサもつけないでどうやって釣るのか。これは師匠に教わるしかない。

で、

「りんご丸君、そろそろ釣り解禁だから、今度の土曜日あたりどうかねえ」

そう、メールがくれば、そそくさとお供する。師匠も、険しい山道を歩くにあたって、連れがほしいのだ。秘伝のわざを語る相手がほしいのだ（たぶん）。

「師匠」は元の私の会社の先輩である。在職中は社内に山岳部を作り、なん度かいっしょに山に行った。私の結婚式の司会もしてくれた。3歳上である。体重も10キロ近くは向こうが上である。大酒飲みでヘビー・スモーカーである。しかし、師匠が奥深い山で、竿を振る姿はあまりに真剣で、絵になる。石の上に乗る。溪流の中にいるであろう、岩魚に向けて細い竿を振る。道糸の先につけられた疑似餌（フライです）が、あたかも川面を飛ぶ虫が誤って落ちたかのように、ごく自然に水中に消える。これをなんどか繰り返す。自身、もはや自然の一部である。姿勢が

美しい。私はテキトウである。師に追いつきたいとか師を超えたいとは思っていない。師匠がなにをいおうが、

「そうかなあ」

とは思わない。真剣でない、というのがいいんだろうね。お互いにとって。テキトウな弟子は、なるべく、師匠が見ていないところで竿を振る。

「りんご丸君、コーヒーでも飲もうか」

師匠がいう。弟子は川の水を汲み（きれいですよ）、コーヒーの準備をする。

師匠が、コーヒーを飲みながら、ボソッと、

「ああいう、竿の振り方じゃあ、だめだよ」

まるで、井伏鱒二氏が師の佐藤垢石から小言をくらっているようなあんばいである。見ていないようでちゃんと見ている。

先日、釣りもまだ解禁になっていないし、山歩きもしたいというので、師匠のところへ遊びに行った。

「温泉のタダ券があるから入りに行こう」

ふたりで「タダ券」を手に温泉に行った。

師匠の家は神奈川県丹沢にあり、温泉は山梨にある。行く道すがら、師匠は山のこと、川のこと、いろいろ説明してくれる。師匠はとても山が好きなのだ。私は慣れない他県の道を車を走らせ、それを聞く。

温泉から上がって、師匠の住む里をあちこちドライブした。

「丹沢の山を一望できる、いい場所あるんだよ。案内しよう」

なんとなく、つげ義春の旅行を思い出した。あの、かみさんと子どもと3人で、山の川原に石を拾いに行く話である（『無能の人』）。

2速にギアを入れないと上れないぐらいの急斜面である。マーチだから行けた。ちょっと大きい車じゃ、通れないね。

確かにすばらしい眺望である。中国の墨絵のようである。目の前に丹沢山塊が折り重なるように広がる。師匠の説明が始まった。

「あれが塔ノ岳で・・・」

私にはどれがどの山なのかさっぱりわからない。

「ほら、あのちょっとへっこんで、また右に上るところのちょっと下の・・・」

師匠は人にもものを教えるのをちっとも苦に思わない。私なんか、根が短気だから、

「なんでわかんないの？」

となる。

だいたい、私は山歩きは好きだが、山の形や位置にはまったく興味がない。どの山がどれだろうと、どうでもいい。山の中に分け入って歩くのが好きなのだ。山から出れば、あとはもうその山には興味がない。おそらく40ぐらいの山に登ったと思うが、自分がどの山に登ったのかまるで覚えていない。5つぐらいしか覚えていない。自分が行った山は一緒に行った人に尋ねるしかない。山を話題にする会話には入っていけない。

さすがに、しびれをきらしたのか、師匠は、

「ちょっと手を貸してごらん」

とって私の背後に回った。師匠は私より背が高い。

師匠は私の手を取り、先ほど説明した山々を私の手で指し示した。

「ほら、この山だよ」

師匠、師匠の目線と私の目線が違うわけだから、いくら自分の指で示しているとはいえ、師匠が見ている山と私に見える山は位置がちょっとズレてますよ。

結局、私にはどれがどれやらわからずじまいのまま、また山道を下りたのでありました。

毎日がエコだった

エコだとかリサイクルという言葉を目にするたびに、なんか、テヤンデエ、という気分になる。

さんざん非エコな生活をしてきたくせに、ひとたび誰かが「エコな生活」を提唱するやそっちになびく。これを付和雷同という。

あたしはスーパーのビニール袋が登場した時分から、

「こんなのむだだよなあ」

と思ってきた(ただし便利だから使ってたけどね)。

だって、あたしが子どものころなんて、豆腐買いに行くのに、ボールを持っていったもの。野球のボールじゃありませんよ！？器です。ホーロー引きの。

醤油を買いに行くにも一升ビンを持っていった。醤油は持参したビンに、樽からホースを使って入れてくれる。ジュースのビンもお金で引き取ってくれた。裸電球は切れたやつを持っていく。持っていかないと高がついた。切れたフィラメントだけ直してまた売ったんだろうねえ。うちの切れた電球がフィラメントだけ付け替えられてどこかの家の食卓を照らしていたと考えると、なんだか絵本の世界にいるみたいだ。

(続きは「有料版」で・・・)

仕事の帰り、公園を歩いていた。幼稚園に仕事に行くときはいつも近くのショッピングセンターに車を止め、行きも帰りもこの公園を通るのだ。

小学2年生ぐらいの女の子が4人、靴のかかとの部分にローラーがついたので滑っていた。うちの娘も小学生のころは、どこに行くにもこれと同じ靴を履いていた。前半分がふつうの靴底でかかとだけがローラスケートみたいになっている。スケートができないあたしにはとてもまねができない。

そのうち、ひとりが勢いよく転んだ。手をついた。

「手の皮がむけちゃった」

自分の右手を見ている。

指のつけ根あたりの皮が2箇所少しめくれている。出血はない。痛いはずだけど、仲間の手前、がまんしている。

「おじさん、怪しい者じゃあないからねえ」

笑いをとりながら、もっていたバンドエイドを貼ってあげる。昨今うかつに親切にもできない。幼女の手を握っていた、と通報でもされたらたまったものではない。

ほんとうはバンドエイドを貼るほどのものでもないのだけれど、バンドエイドには別の効果もあるのだ。

幼稚園の園児たちはちょっとでもけがをするとすぐに職員室に飛び込んでくる。先生にバンドエイドを貼ってもらおうとする。

「ンなものあ、ツバでもつけとけば治るんだよ」

暴言は承知の上であたしはいう。

幼稚園の先生によれば親が承知しないのだそうだ。訴える、念書を書け、という親もいる。バカな親が増えたもんだ。

バンドエイドさえ貼ってもらえれば園児たちはまた元気に園庭に飛び出していく。

私が子どものころ（昭和30年代ですなあ）は「血止め草」というのがあった。種として絶滅していなければ、いまでもあるんだろうけど、どの草か忘れてしまった。それにいまどき、地方の子どもだってそんなもの使いはしないだろう。クローバーみたいな、1円玉よりも小さい、草の葉である。その表面につばをつけ、けがをしたところにペツと貼る。傷が大きければ2枚貼るだけの話である。治療はそれで終わり。遊びに復帰する。ネコならぺろぺろなめて終わりのところを人間の知恵を活かして葉っぱで傷口を覆うのである。ちょっと深く切れて血が流れたような傷でもたいていはこれを貼って終わりにする。あんな葉っぱに薬効があったとは思えない。おまじないみたいなもんである。

あたしらのころには、上は中学生、下は小学1年生ぐらいまで徒党を組んで遊んでいた。年長者が親分でその下はぜんぶ子分である。ちょっとぐらい血が出て泣きでもしようもんなら、

「泣くやつは家に帰れ」

ということになる。

家に帰ったところで、誰かが待っていて、薬を塗ってくれるわけでもない。

血が出た箇所に血止め草をはりつける。けがをしたことはそれで忘れる。

それにしてもよくいろんなところに遊びに行ったなあ。

営林署の畑に製材された木が積んである。たぶん苗木を植えたりするときを使うのだろう。大きさ長さといいおもちゃの銃を作ったりするのにちょうどいい。親分が行動を指示する。植え垣のすき間から忍び込む。土の上を腹ばいで進む。各自、持てるだけの板切れを片手でつかみ、また腹ばいで戻る。匍匐前進ということばを知る前に、実地で匍匐前進を訓練した。

4, 5キロほど歩いて他人の栗山に足を踏み入れた。見上げるような栗の大木が並んでいる。その間に落ちている栗を手分けして拾う。麻袋に3つもある。よくそんな場所を知っているものだと感じる。

養殖池で鯉を釣ったこともある。竿は手近に生えている竹を使う。やぶに隠れ、竿だけ出す。養殖なのでかんたんに釣れる。50センチほどの鯉が釣れて、あわてたことがある。

手作りのボート（といっても単に木の箱である）に3人乗って沼に漕ぎ出した。ちょうど真ん中まで行ったところで木の箱が沈みだした。着の身着のまま岸に向かって泳いだ。よく死ななかったものだ。焚き火をして服を乾かした。水中メガネなしで沼へ潜る。底の泥の中からカラス貝を取ってきて焼いて食べた。

後になって、誰かが電信柱用に置いてあった丸太を4本盗んできて、イカダを作った。これにもずいぶんお世話になった。

線路の両脇には防風林がある。この防風林は人目につかずよい遊び場になった。線路に進入禁止の柵なんかなくて、出入りは自由である。父などよく線路をの上を町まで歩いていった。

ある日のことである。線路から地面までの斜面をごろごろ転がる遊びをしていた。草は枯れ、転がって遊ぶにはちょうどよい。何度か転がり、下について起き上がったときに左手に違和感を覚えた。

左手の親指の横から指の付け根までインディアンが放った矢のように、萱が1本突き刺さっていた。転がってくる途中で突き刺さり折れたのだ。30センチぐらいある。自分で引き抜いた。痛みはそのあとやってきた。血が大量に流れ、もはや血止め草なんかじゃおさまりがつかない。

出血場所を手で押さえ、泣きながら家に帰った。

家に帰りついたころには血は止まっていた。夕方帰ってきた母に状況を報告する。母は、

「赤ちんきでも塗っておきなさい」

という。そのとおりにする。

翌朝、左手の指がもやは指とは思えないほど腫れていた。熱ももっている。本人よりも母のほうが驚いた。すぐに村の医者に行く。おそらく、村医者としては最新の設備だったのだと思う。左手にレントゲンを放射する。スクリーンに手の骨が透けて見える。指の骨の近くに萱の一部が黒く写っていた。局所麻酔をかける。母と看護婦が私をおさえつける。スクリーンを見ながら、医者が針金状のものでその残存物をかき出す。これがまた痛かった。

そのときの傷はいまでも私の左手に残っている。

子どもたちが小さかった時分には、その傷跡を見せながらあたしはよくいっていたものである

「ンなものはあ----」

穴のあいた年賀状

初めて書いた年賀状のことはいまでもよく覚えている。

穴があいていたからである。

小学校に入って最初の正月、級友のひとりから年賀状が届いた。

父親同士が同窓生だった。

父は、ふだん書類入れにしている木箱から未使用のはがきを1枚出してくれた。ふつうの官製はがきである。

鉛筆で書いた。

書き方は父が教えてくれた。

言っておくが、父は農夫である。大正から昭和初期にかけての義務教育は6年制で尋常小学校を終えるとたいがい働きに出る。父は末っ子だったのと農作業には向いていない体格だったせいで、さらに2年間、高等科に進むことを許してもらえた。

父にくる年賀状は商業的なものか政治的なものを入れても数枚である。父が出す年賀状もほぼ同数である。郵便局にはその年の干支をかたどったスタンプが置いてあった。そのスタンプをはがきの裏面に押す。余白になにかひとこと添えて年賀状とする。

母宛の年賀状は見たことがない。もとより母は、文字は読むのも書くのも苦手である。

かつての級友の子どもから自分の息子に年賀状がきた。それがうれしかったらしい。

あいたスペースに、なにか親密めいた文言を書いてはどうかと助言してくれた。

下書きをすればいいものをいきなり書いた。3、4行の空白に、年賀状をもらったお礼、冬休み中のこと、学校が始まってからのことを、父の言うままに書こうとした。とても収まりきれない。消しゴムで消す。書き直す。それを繰り返しているうちに紙に穴があき始めた。それで筆を止めた。

人からもらった年賀状で、もう1枚、いまでも鮮明に覚えているのは初めて女の子からもらった年賀状である。中学に入って最初の年にクラスの女の子から、年賀状を出したいからと住所を聞かれた。いいよ。それぐらい。ほかにも複数の男の子に住所を聞いていた。

届いた年賀状には、丸っこい、きれいな文字で、学校が始まったらまた一緒に勉強やクラブ活動に励みましょう、みたいなことが書いてあった。本人の性格そのままに、兎が飛び跳ねているような、元気な文章だった。少しは私のことが好きなのかしらとなん度も行間を読んだ。それは違ったらしい。翌年からは出す人を限定したようだ。

父に年賀状の書き方を教わっていらい、どれだけの年賀状を書き、どれだけの年賀状を出しただろう。いまとなってはそれらのどれも覚えていない。

18歳で東京に出た。新聞で「虚礼廃止論」を読んだ。それに賛同する。年賀状を出すのは止めにした。人からもらっても返事を出さないと決めた。おめでたくもないのに、「おめでとう」もないものである。

大学を出て会社勤めをした。結婚をし、家庭ができた。知人が増え、引越しを繰り返した。転居通知を出す。いつの間にかまた年賀状がついて回るようになった。仕事上のつきあいでいただい

た年賀状に返事を出さないのは失礼である。仕事が変わるたびに、年賀状を交換する相手が変わった。向こうから届かなくなると自然にこちらからも出さなくなる。こちらから出しても返事がこないものには、次の年からはこちらからも出さない。55歳も過ぎると相手のほうも亡くなったりする。もらうからお決まりで出していた年賀状もある。自然消滅的に虚礼がなくなった。

パソコンや電子郵便が普及している現在、手書きの年賀状は希少価値をもつようになった。もし私が生まれて初めて書く年賀状を、コンピュータを使って作ったり、電子郵便で送っていたとしたら、50数年たったいまでも、初めて書いた年賀状のことを覚えているものだろうか。

「お年玉付き年賀はがき」の当選番号を見ていたら、ふと、初めて書いた年賀状のことを思い出しました。

パソコンが壊れた

パソコン指導をしている幼稚園のノート・パソコンが壊れた。しかも2台、ほぼ同時に壊れました。1台は基板を交換し、もう1台はハードディスクを交換するほどの重症でした。

その翌日、別の幼稚園に行ったら、偶然というかここでも1台壊れた。どちらもちゃんとしたパソコンを買い、ごくふつうの使い方をしている。

パソコンは壊れます。

パソコンは洗濯機やテレビとは違う。

パソコンがフロッピー・ディスクで動いてた時分から使っていた身としては、パソコンがふつうに動いているほうが奇跡みたいに思えます。

当時のパソコンはハード、ソフトともに非常にシンプルで、私など、パーツを通信販売で買ってなおしたことがあります。半田付けしてなおしたことさえある。抵抗やコンデンサなどパーツが見えていた。基板の上をラインが走っていた。基板をちょっと手で曲げるか光にかざせば、クラック（亀裂）がわかった。そこを半田で埋めればよい。真空管でラジオや無線機を作っていた技術を応用すればなんとかなった。

いまの基板は3層、4層になっている。5層、6層という恐ろしいのさえある。6枚の基板を重ね、その間を銅のラインが走っているわけです。配線があまりに複雑に複雑にできている。1枚の基板の裏表を使ってラインを走らせたぐらいでは追いつかない。重ねた基板の上に穴（スルーホール）があげられている。この穴を銅でメッキすることで、各基板が導通する。単位はマイクロンです。検査の過程でX線や顕微鏡を使います。肉眼では見えません。2年ほど前、基板を作る工程をビデオで撮影したことがあります。それでよく知っている。

ふだん、VB(Visual Basic=プログラミング言語の一種)をかじっています。VBでさえあんなにややっこしいのだから、いまのパソコンのアプリケーションやらOSがどれぐらい「ややっこしい」のかは想像できます。おそらく「気が狂うぐらい」複雑でしょう。とてもひとりの人間の頭脳では把握できないレベルだと察します。

だから、「よく壊れもせずに動いてるよなあ」と感激するわけです。

園長からパソコンとの「向き合い方」について質問を受けました。

いまのパソコンはホッチキスや電卓と同じ、「事務機」です。ちょっと高い。値段の比較で言えば「コピー機と同じぐらい」と言えるでしょう。コピー機はメカニカルが非常に複雑です。これもまるごと1台分解したことがある。よくわかる。パソコンはメカニカルもソフトウェアも複雑。どちらが壊れても動かない。

3年もすれば新しい機種(=OS)にとって代わられる。Windows XPさえまだ覚えている途中だというのが、Vistaを乗り越えて、Windows 7が売られています。

パソコンは3年で減価償却するぐらいの目安で考えてください。大事に5年も10年も使ったところで、あなた自身が時代から遅れているということを証明するだけです。3年で新しいパソコンに乗り換える。いまだき謄写版（とうしゃばん、と読みます）を使っている人なんかいない

でしょう。いるのかねえ？

パソコンは壊れます。しかも突然、壊れる。ほんとうはそうじゃないのだけれど、「突然壊れる」と思ってください。だから、日常的には、いつ壊れてもいいように使う必要がある。

壊れたら仕事ができなくなります。最低2台は用意してください。一瞬でデータが消えます。パソコンが壊れたことよりも、こちらのほうが被害が大きい。ショックはもっと大きいです。ある日突然、「あなたはガンです」と告げられるようなものです。

ここから先の話は素人には無理です。専門家に依頼してください。

本が売れなくなった

本が売れていないらしい。書店には本があふれていて、毎日のように、新刊の広告が新聞に載っているのに。定期刊行の雑誌は痛ましいほどに休刊、廃刊が続いています。

図書館に行くとよくわかる。いままで雑誌が載っていた棚に「〇〇は休刊になりました」と貼ってある。

本が売れないとどういうことになるか。出版社は経営が苦しくなる。編集者は職を失う。その前にまず執筆者が稼ぐ場を失う。

デザイナー、DTP屋さん（昔でいうところの写植屋さんです）、カメラマン、フリーライター、イラストレーターなどが芋づる式に職をなくす。

数が多くなってくると、印刷屋さん、製本所、紙屋さん、ひいては運送屋さんなどがこれまた芋づる式に苦しくなる。本が売れないから出版社は本を作らなくなる。広告が減る。広告業界は苦しくなる。ドミノ倒しです。

毎日新聞のコラムで、「これまで出版業を支えてきた技術がなくなるのは困る」と騒いでおりました。ほんとかなあ？困るのかねえ。誰が困るんでしょう？まあ、新しい本が出なくなれば、書くコラムもなくなるから困るのでしょうか。少なくとも、消費者は困らない。だって、本がいらないから買わないのだ。

そもそも、昔は（そうとう、昔です）本そのものがなかった。必要に迫られて（市場ができて）グーテンベルクさんとやらが印刷技術を発明した。それが現代のコンピュータを駆使した出版技術へとつながっているわけです。

編集者が困っているのは、出版技術が衰退の危機に直面しつつあるからではなくて、単に職がないから。出版技術が途絶えようがなにしようが、食べていく糧が得られればそれほど困りはしない。そこんところ混同しないように。

20代の頃、いつとき新聞社にいたことがある。新聞作りはほぼコンピュータ化され、「ワールド」と呼ばれていた。coldである。対してhotと呼ばれるのは「活字」である。新聞で使われる文字のひと文字、ひと文字を、鉛を溶かし、型にはめこんで作る。「新」「聞」などの同じ活字が40個も50個も木枠の中に並んでいる。職人が原稿を片手に対応する活字を拾っていく。大変な作業です。熟練も要する。

使い終わった活字はまた溶かされ、機械に流し込まれて活字となる。

使った活字を元の場所に手間を考えたら、溶かして作り直したほうが速い。高温で溶けた鉛が噴出口から流れ出てくる様はまさにhotの名にふさわしいかった。

活字を使って版を組む場所は地下にあり、「工場」と呼ばれていた。

ある日、工場から、6階の編集部には私のところに電話がかかってきた。

「この原稿を書いたのは誰だ」

肉の市況記事で、豚肉や牛肉が前日に比べ何円安（高）かが表になっている。書いてあることは正しいのだが、列が左にひとつずれている。見出しと数値があっていない。データとしてはまったく要をなしていない。こっぴどく叱られた。おかげでふだん入る機会のない工場の内部を見学できた。

こういう、hotで印刷物を作る技術もほぼすたれた。だいたい鉛そのものは環境によくない。むしろすたれてよかったかもしれない。

技術は必要があるから生まれ、必要がなくなれば消える。新しい技術がそれまでの技術にとって代わっただけである。

そうそう、私の本も売れなくなって、「読者サポート契約」なるものが打ち切れうである。ほんとうは人ごとではないのです。

経済が悪くなって、いま一度自分のあり方なんかを見直すっていうのはほんとうはいいことだと思うよ。地震がこないと地震がこないことのありがたさんかわからないみたいだね。まあ、戦争はこなくていいけど。

毎日新聞でも書いていました。

「読み応えのある本はこれからもささやかながらでも出版されていくでしょう」

いいことです。いままで、どうでもいい本があまりにも多かった。絶版になった本もいい本は復刻してほしい。

わけありりんご

「りんご1日1個で医者要らず」などといっているわりにはりんごを食べていません。そのせいかカゼをひいてしまいました。前の日、冷雨がふる中、畑仕事をしていたせいです。作っていたのはりんご、ではなくて、スナックエンドウ。気温が低い日が続くのに、よくまあ、すくすくと伸びること。2月ですよ。おとといなんぞ、数年ぶりで雪が降りました。お隣の畑をのぞいたら、すでに花が咲きかけているのもありました。蝶が飛ぶ前に花が咲いたら、だれが受粉させるんでしょう？そんなことなど気にするふうでもなく、つるは雨空に向かって伸びています。

竹と麻ひもを使い、支えを継ぎ足してあげました。それで体がぬれてしまった。

37度7分もあるとも知らず、ふらふらのていで仕事に行きました。帰ってきて24時間ほど寝込んだら熱が引きました。すごいねえ、貧乏人は医者にもかからず自力で治しちゃうんだから。

カミさんの使いで生協へ行ったら、「わけありりんご」というのを売っていました。1箱3kg、ダンボール箱に15個ほど収まって780円です。数字に弱いアタマで計算してみました。1個あたり52円です。相場は1個100円です。さっそく買って帰ると、カミさんから「勝手に物を買ってこないで！」と叱責を受けるしまつです。いいじゃない、自分のポケットマネーで買ったんだし、それに「わけありりんご」と聞いて、なんだか、故郷の幼なじみに横須賀でぐうぜん出遭ったような感じがしたんだもの。

幼なじみの話をしましょう。

私が子どもの頃はりんごは家にふんだんにあった。家庭消費用の箱に入っているりんごは勝手に食べてよろしい。というか、家にある食べ物で勝手に食べていいものは米か味噌、漬物、りんごぐらいしかなかった。塩もあったか。砂糖は？ない。サッカリンという、いまじゃあ、毒物の一種だろうけど、代用品があった。試験管みたいなガラスでできた小さな容器に入っていた。きわめて薬物っぽい。「チクロ」というのもあったなあ。こちらは錠剤の形をしておる。新聞紙のきれはしに包んで上からかなづちでたたく。粉薬化したのをカボチャを煮るときなんか混ぜる。戦時中じゃあ、ありませんよ！？なんでも砂糖の100倍甘いんだとか。いくら食べるものがなくなってもそんなものかじった日にやあ、ネコ要らずですよ（ネコ要らずも通用しないか）。

学校から帰ってお腹がすけばりんごです。ストーブの上に乗せて焼いたりりんごも味に変化があっておいしかった。病気になって食物を受けつけなくなると母親がりんごをすりおろして食べさせてくれました。これは理にかなっている。りんご酸とビタミンCがたっぷり摂れる。点滴をそのまま口から入れるようなもんです。りんごを煮込み、チクロで甘くしてジャムも作ってくれました。あんなにサッカリンやチクロを食べたのに50歳を超えてなお元気に生き抜いているのは、合成甘味料の毒性よりもりんごが持つ薬効のほうがまさっていたのかしらねえ。

飼っていた豚のえさもりんごです。りんご畑で、落ちているりんごをボール代わりに野球の真似事もしました。毎日りんごをかじっていると歯なんて磨かなくなるとどうってことはありません。歯医者に通いだしたのはりんごをあまり食べなくなった高校生になってからです。

高校を卒業し、東京に出てきて驚いたことがふたつある。ひとつは、どの家も皆、鍵をかけていること。新聞配達をしていたのでよくわかった。村じゃあ、どこの家も鍵なんてかけない。用心のある家でせいぜい、寝る前に戸につっかい棒（これを用心棒という）をするぐらいなもん

です。

もうひとつはスーパーでりんごを売っていたこと。町の店はともかく私の村じゃあ、りんごを買って食べる人なんかいません。三浦生まれの私と同世代の人と話をすることがあります。

「昔は魚屋なんてなかったよなあ。浜へ行って地引網を引く手伝いをすれば、いくらでも魚がもらえたんだもの」

おもしろいねえ。似てるねえ。りんごなんて買わなくたって、りんごの収穫作業の手伝いに行けばいくらでももらえます。

「わけありりんご」は市場には出せない。自家消費しようにも限度がある。隣近所に無料で配るのです。

(ずいぶんな文字数を書いたなあ。もうちょっと書きましようか)

東京のスーパーでりんごが売られている事実にも驚いたけれど、そのりんごがまあ、非現実的なほど輝いていたのにもびっくりした。ワックスをかけて磨いたんでしょうねえ。なつかしくてつい買おうかと思ったけど値段を見てサイフを取りだすのをやめた。銭湯代が50円するかしないかの時代にりんごが1個80円ですよ(それを思うとりんごの値段は上がっていないですね)。

りんごがどうやって木に実を結ぶか、その管理と収穫の舞台裏についてならいくらでも話せます。でも、そのりんごが実際にあんなふうに店頭で並んでいるとは知らなかった。私が知っているりんごとは別物です。あれは額に入れて飾っておくりんごです。

それから数十年後、仕事でニューヨークに行ったら、スーパーの店頭でりんごを売っていました。あちらのりんごのなんとまあ、貧相なことか。どちらかという、子どもころ、野球のボール代わりにしたりんごに近い。味もまあ、そんな感じです。日本のりんごはアメリカが祖国だというのにねえ。主として料理に使うからでしょうか。

私は九九を習うより先に、畑で母親からおいしいりんごとおいしくないりんごの見分け方を教わりました。母親は九九はたぶん(いまでも)知らないと思うけど、そういうプロの知識はあった。

「りんごは、わけありがいちばんおいしい」

それが母の教えです。人間もそれに近い、とつけ加えたような気もするがそれは、後年の私の人生訓かもしれませぬ。

(やっと本題にたどりつきました)

生育過程でごく自然にできた「傷」や「ひび」なんかがあるのはすべて「わけあり」です。上からおしつぶしたような、ちょっとひしゃげた形のりんごも規格外。それらは母が腕にぶら下げた竹籠(かご)には入りません。そのまま地面に落とされます。ほんとうは、ひびが入り、ちょっとひしゃげたりんごがいちばんおいしい。メロンの網目と同じ理屈なのではないでしょうか。ひびをかばうかのように「蜜」がたまる。実際には蜜ではないのだけれど、甘みは増す。たまに、そういうとって置きのりんごを見つけると母はじぶんのエプロンのポケットにそれこそ取って置いてくれる。それを私にくれた。

見た目の美しさと食べたときのおいしさとは別ものです。

特に昨今のりんごは大きさ、色のつき具合、形の良さ、糖度などを基準にランクづけされ、改

良されています。りんごが本来もっている野生的なおいしさというか、りんご酸が口に残るようなおいしいりんごが姿を消してしまいました。品種でいえば、私が好きだったのは、国光であり、紅玉ですねえ。旭日も好きだった。りんごの個性がはっきりとしていた。いま市場に出回っているりんごはすべてそれらの品種改良品です。野生趣ともいうべきものが消えてしまった。甘くなっただけです。

消費者がバカなんですよねえ。ものを見ただ目で選ぶ。生産者はその市場原理に合わせるしかない。

りんごは上半分が赤くて下半分は青いままが自然の色です。太陽は上から当たる。私の子ども時分はりんごに色を塗るときにはそうやって色を塗った。いま、売っているりんごはそうはなっていない。りんごの木の下に銀色のシートを敷いて下からも太陽光を当てているからです。全体に、きれいに赤くなっている。やたらと手をかけて作ったりんごを食べておいしいんでしょうかねえ。わけありのほうがいいと思うけどねえ。